

ふるさと、風

第60号 (2011年5月)

風に吹かれて (39)

白井啓治

『石の上にも三年が過ぎて五年も過ぎて』

当会報も今月号で満五年となり、バックナンバーも60号となった。本当ならこの5月号は、60回記念号とするのであるが、小生の感覚では、達成を記念するよりも次のステップへの出発を記念する方がいい。

過ぎ去った時を振り返り、懐かしがったりしても何も始まらない。だがかと言って、もう済んだことだから、と全てを過去の事として責任を取らない裁きにしてしまう事は更に許されることではない。過去とは責任をなすりつけるところではないし、ましてや未来とは責任の棚上げする場所でもない。それは決して許されることではない。

そんなわけで私は、夢の現実である明日へ向けての第一歩を踏み出すことが大事であり、その日を記念とすべきであると思っている。一つを達成することよりも二つ目を出発することの方がほど重大なことであると思う。

地方文化の、いや地方ではなく石岡の文化の閉塞は五歩、十歩を進むことを考えた二歩を確り踏み出さない事であろう。歴史や文化活動について話をすると、俺らも昔やったことがあるけどダメ

だった。そういう土地柄なんだ、という。

しかし、それは土地柄などという問題ではなく、自責(自分の責任)を持って第二歩を踏み出そうとしない、というのが正解であろう。

第一歩というのは鳥合の衆の勢いの成り行きで始めることができる。だが第二歩からは大きな自責が付いて回る。ついて回るといっても確りとした自責の認識を持っていないと第二歩は歩き出せないのである。

第一歩はどんな動機でも始めることができるが、二歩・三歩と進めるのは自責を意識、或いは認識したうえで葛藤、即ち逡巡と洞察がなければできない事ではない。葛藤とは先のあるべき姿を確りと描いた者でないと起こりえない逡巡と洞察である。

こんな風に言ってしまうと来月6月の61号は、6年目スタート記念号にして、会員の皆さんに記念号原稿を別途要求しなければならぬが、さて「うん」と言ってお貰えるだろうか。

大震災から二か月が経つ。天災による災害は着実に復興の歩みを見せている。しかし、原発事故などの人災は一向に復興の姿は見えず、ますますに人災の拡大を見せている。

映画監督というと演出の頂点でいかにも恰好よ

く聞こえるかもしれないが、やっている事と言えば現場監督である。謙って言っているわけではない。作品は現場が作るものであるから、まさしく現場監督なのである。

現場が良い作品を作ると同様に、原発事故の収束も現場が作るのであるが、現場を取り巻いている環境、即ち経営陣、監督官庁、政治家、そしてであろうことかマスコミに至るまで皆が現場の邪魔をしていると思えない。

私はヒステリックな原発反対論者ではない。想定を利の天秤で計らない原子力発電の存続を考えれば良いと思っている。勿論、電源の大半を原子力に依存すべきではないとも考えている。利の天秤にかけない想定値での安全が理論的に確保できるのであれば活用すべきであろう。

福島原発に関して言えば、想定値を利の天秤にかけてしまったことが人災であり、それは世論を盾にすればすべてが許されると考えた利権政治家がいたという事である。数は力と言った利権政治家と同様に、世論を金で買おうと発想した奴がいたのだ。そしてそれに同調して世論を売った奴らもいるのである。

そして何よりもいけないことは、俺は反対していたと言っただけを正当化しようとする奴らである。民主主義における多数決の論理というのは、いかに反対をしていたとしても多数決に負ければ、自分も賛成したという事になるのである。だからいったん事が起こってしまったから、俺はそれに反対したと言うのは天に向かって唾を吐くことと同じなのである。正にも負にも両方に責任を持たなければならないのが民主主義なのだ。反対したというのは免罪符にはならないのだ。

方八丁と要害

鈴木 健

「方八丁(ホウハッチョウ)」とは八町四方の意味で、おもに本格的な国府域の規模とその所在を表すのに使われました(丁は町の略字。一町は約一〇九丁)。それが石岡に、知る人もなく小字(コザ)名としてひっそり残っています。それは常陸国府のあった旧石岡町からは北にはずれ、現、石岡市立北小学校付近に位置しています。そこは北西から南東に向けて張り出した舌状台地の先端部分であり、東は園部川、北は半ノ木南谷津、西から南にかけては、基石沢から根当に続く谷津に囲まれた地形です。昔のいくさ場として見ると、守りやすく攻めにくく、砦を築くには絶好の地形です。近くには「要害」という小字があり、そこに室町時代の砦であった根当要害がありました。

このようなことを考え合せると、当初の国府は防備や農耕の適地であったここに構えられ、後に水運とか面積などの理由から、旧石岡町の方に移転したと見ることができます。しかし、この方八丁付近には国府に関連するような遺構や地名が残っていないし、八町四方を確保だけの敷地もありません。したがってむしろ、つぎに引用するような東北の方八丁の変形と見たいと思います。

「古代中央政府が律令制により未開の東北に計画的村づくりのため、蝦夷に備え一定の区画に柵戸(キノヘ)、城堡(シヨウホ 土塁、堀)などで囲った城形をつくり、兵士兼農民の屯田兵を配し、地方政治・軍事・交通の役割を持たせた集落が方八丁で、この古代官衙的施設跡に特徴的に「方八丁」の地名が見られる。」

(小島俊一『奥羽山脈・北上川流域の地名』)

「岩手県地方でも北上川流域にみられるのが「方八丁」という地名です。これは古代に「方八丁」という呼び名があり、城柵(都城)の別名になっていたことから生まれた地名のようです。例えば盛岡市の下太田の「方八丁」は「志波白」の跡でしたし、水沢市佐倉河の「方八丁」は「胆沢城」の跡でした。…このほかにも九つの「方八丁」が残ります。」

(大正十三年造『岩手の古地名物語』)

これらの解説から、それは、ヤマトの東北進攻作戦に際して、その占領地の軍政・民政の核として設営された城構のことで、兵站(ヘイタン 後方で食糧や軍用品の補給・調達の任にあたる)基地の性格も備えていた様子が読み取れます。また当初は、つぎのように農民もそのなかに囲い込まれていました。

「凡そ東辺、北辺、西辺に縁る諸郡の人居は、皆城堡内に安置せよ。その営田の所は、ただ庄舎(開墾小屋)を置け。農時に至り、営作に堪えん者は、出でて庄田に就け(開墾地で就農せよ、収斂(シユウレン)収獲 おわらば、勅して還せ(ロクシテカエセ 連れて帰れ)。その城堡崩れ落ちなば当処の居戸を役し(そこに住む者を使役し)、閑に随ひてひまにまかせて修理せよ。」

(大正令(701年)の軍防令縁辺諸郡人居条)

その「東辺、北辺とは、謂う、陸奥、出羽等の国なり」(『令集解古記』)大正令の注釈書 ということでした。その城堡面積の基準を方八丁としたので、それがあとまで城堡域自体の呼称として残ったのではないのでしょうか。

石岡の方八丁をこのような角度から見なおした場合、そこはヤマトの東方進攻前線が北上したあとの兵站あるいは後方支援基地として位置づけら

れていたことが想定されます。そこでは武器・武器の調達と食料の徴発・備蓄、それらの前線への移送、補充軍の召集・訓練・前線派遣、あるいは国府守備と、きわめて重要な任務が課せられていたことが考えられます。

それらの後方支援に必要な武器や農具等を製造・供給したところが、おびただしい数の鍛冶工房跡が検出された「鹿の子(カノコ)遺跡」だったのではないのでしょうか。そこでは、鎌・鋤・刀・鏃等の農武具が発掘され、兵士自備戎(シユウ)具簡閲簿(兵士が準備すべき兵器の点検のための帳簿)も出土しています。『市制三十周年記念石岡の歴史』には「八世紀後半から始まった蝦夷征討の基地として重要な位置を占める国衙工房の機能を有した遺跡であると考えられている。」とあります。そこは国府域の中心部と方八丁との中間に位置しています。そして「蝦夷征討の基地として重要な位置を占める」と言いながら方八丁には関心を示さないのです。かつて、方八丁について拙文を出しました『常陸の歴史』(十二号)が、無視されています。この稿についても同じことが言えますが、資料不足で想像に頼る記述が多かったため、いたしかたなかったとは思いますが、しかし、少なくとも、古代史のなかで重要な役割を持つ「方八丁」が固有名詞として石岡にあることは事実なので、その解明を避けて通っているようでは話にならないのではないのでしょうか。

「新しき発見とは、そこにありながら光があたらないものに、光をあてることである」。これがシロウトからプロの皆様へ「贈る言葉」です。

農民には過酷な負担が課せられていました。たとえば、七八〇年には常陸国に糶(ホシイイ 乾飯)一萬石を陸奥軍所へ納入せよ

との命令が出されました。一人五斗で一包とされていたらしく、一人一包ずつ背負うとすれば、二万人の壮丁が動員されることになり。往復二十日とすれば、その間の食糧も上乘せ、農耕はお手上げです。ともかく本隊は方八丁に集結し、逃亡や略奪に備えた護衛兵が付き大行列を組んで出発したのではないのでしょうか。

なお、「鹿の子」についても触れておきましょう。

全国的に、製鉄や鍛冶の行われた跡地にカネコやそれに類似の地名が付けられることが多いようです。カネは金属一般の名称ですが、鉄(クロガネ)を指すこともあり、カネコは鉄子・鉄粉(カネコ)つまり砂鉄ということになります。石岡市井関には金子沢と呼ばれるところがあり、砂鉄や鉄滓(テッサイ)製鉄の際に生じる屑(金糞)が散乱していました。霞ヶ浦市の下志筑にも製鉄跡に兼子(カネコ)という小字があります。鹿の子(カノコ)も、そこにあった製鉄鍛冶工房跡にちなんだ命名でしょう。

「要害」(ヨウガイ)という語彙が『続日本紀』(797年)の大宝二年(702年)の項に現れ、中世に多用されました。それは、味方にとっては(重)要で敵には(障)害となるの意味で、地勢が険しく守りやすい攻めにくいところ。転じて、そのような地点に築いた城塞・とりで・要塞のことも指します。方八丁に隣接した小字に要害があることは上記のとおりですが、県内では、砦や城館を指す用語であったものが、のちにその跡地の地名になり、今でも以下の各地にその要害が小字名となつて残っています。石岡市石岡、同半田、高萩市下手綱、日立市助川町、同河原子町、龍ヶ崎市半田、つくば市高崎、稲敷市寺内、常陸太田市国安、大子町町付、行方市羽生、下妻市見田、など。

母音oは口の開き加減でoに聞こえるので、と

ころによつてはヨウガイはユーガイになり、それにつぎのような漢字を宛てた小字名が現存しています。常陸太田市下大門町の幽界、常陸大宮市長倉の遊替、常総市若宮戸の夕貝、など。

しかし、より普通の呼び名はリュウガイで、それにもさまざまな当て字が使われています。

稲敷市阿波、美浦村舟子、鹿島市須賀、大子町上野宮、利根町横須賀などに竜貝、鉾田市徳宿、大子町佐貫、つくば市沼田などに竜替、そのほか竜界(常陸太田市)、竜海(同)、竜害(同)、竜蓋(同)、龍外(同)、竜会(鹿嶋市)、竜涯(筑西市)、竜ヶ井(龍ヶ崎市。その龍ヶ崎も竜ヶ井崎の転である)、竜ヶ居下(鉾田市)、竜ガイ(常陸大宮市)、竜かへ(牛久市)、竜ヶへ下(同)、流替(霞ヶ浦市)、流外(神栖市)、リュウガイ(ひたちなか市)、など。

このように各地の要害跡地には嗜好を凝らした関連小字名が見られます。

茨城の在来の発音ではyはzに聞こえます。それはzを発音するとき舌の先を上前歯の歯茎に近づける癖によるのではないのでしょうか。「イさへーれ(湯にはいれ)」、「おいはんだ(お夕飯だよ)」さらにその舌先を硬口蓋の方へ少しずらして発音するので、そればzと聞こえます。ユウベと発音をしているのでしようがリーベと聞き取れます。ヨウガイはユウガイからイーガイになり、リーガイと聞き取られます。年配の方は龍ヶ崎をリーガサキと発音するので、同様にリーガイのリーには自然に竜をあてることになります。ガイの方はそれぞれ地域の地帯で思いつくまま。なんと自由な発想でしょう。鹿の子もそうでした。地名の語源を始めからその漢字の意味で解説することに固執する人は、パニックにならないようにしてください。

地球が1.4個分必要

菅原茂美

なんじやこのタイトルは？ と思いかもしれないが、言わんとするところは……。

現在地球上の人口は約70億人。この70億人の衣食住を賄うためには、地球の表面積が4割ほど足りない。しかも現代のように、活発な経済活動を続け、ハイレベルの消費人口が増えていくと、現状の地球では確実に狭すぎる。物質文明の繁栄も良いが、その行く先が案じられる(ある著名な経済学者の話)。

言いかえると、たとえば³⁵3坪の家に5人家族なら、狭いながらも、まあまあの生活ができれば。

しかし、急に家族がもう二人増え(4割増、7人家族となると、もう狭くてやりきれない。それぞれが自己主張して、自分の部屋を持ちたい。家具もそれぞれ持ちたい。自分の好む音量で、音楽も聴きたい。友達を呼びパーティも開きたい)。となると欲求不満でイザコザ。平穏な家庭生活などできつくない。オヤジ奮発して¹⁵15坪増築し、⁵⁰50坪ほどになれば、各自、ほぼプライベートも保て、どうやら人間らしい生活が営めよう。

このことは、言い方を変えれば、ある人の生活が、¹⁰⁰100円の収入に対し、¹⁴⁰140円の浪費を続けている……ということにもなる。無計画な、向こう見ずの浪費生活。飽くなき欲望の追求。当然結末は、見るも哀れな破産状態。夜逃げしようにも行くあてもなし。悲しいかな、一家心中と来ては、目も当てられない。

今、「ある人」と例に挙げたが、これを「人類」と置き換えたなら、「一家心中」は「人類の滅亡」に相当する。人類はそんな愚かな結末を招くよう

な道は歩くはずがない。抑制策は機能するはず。万物の霊長であり、現生人類の分類上の学名「ホモ・サピエンス」は「智慧ある人」の意味だ。智慧があるなら、滅亡に至るような、そんなアホなことは未然に防ぐはずと、大きな啖呵を切りたいところだが、ドッコイそうはいかない。

人類は、何かの方向を定めると、理性も知性も跳ねのけ、一直線に暴走する傾向がある。歴史上、名のある大王率いる数々の帝国がそうであったし、未開地を侵略した植民地主義がそうであった。南北米大陸やオセアニアを凌駕したヨーロッパ列強がそうであったし、我が国でも、近年の太平洋戦争が然り。古代の国家成立に至る過程も同じだ。

大陸の戦乱から逃れてきた、いわば敗者復活戦みたいな政権争いに勝利した「朝廷」とやらが、平穩に暮らしていた東北住民を征討する。坂上田村麻呂はその功績により、位階を駆け昇る。

平安後期の源義家など、前九年・後三年の合戦を平定した英雄とされているが、後の世の者が、美化して著わしたもので、いずれも、勝った者が正義、負けた者を「賊」とする歴史上の「うそ」の塊と言える。人類の歩んできた道は、徹底した欲望の追求。そのためには手段を選ばない、残念ながら「弱肉強食」の非道だ。

さて、その智慧ある人が、今日まで、「身の丈」以上の物質文明にドブプリ浸り続けてきた。自分の甲羅が入る以上の豪華な穴を掘ってきた。特に我欲の強い者は、人がどんなに苦しもうが、世の富を独占しようとした。

万里の長城もピラミッドも、一体それがなんだというの？ ただただ権力の誇示？ 近代では、コンコルドは廃止になったが、ジャンボ機にエア

バス。巨体化して公害を撒き散らす。更に宇宙開発競争。危険なおもちゃの核保有競争。どこからどう見ても智慧ある人の仕種とは思えない。更にニューヨークの摩天楼や東京のスカイツリーなど、「覇」を競う野望丸出し。これも、野生動物が、『オレはデツカインだぞ！』と背伸びする姿とあまり変わりはない。いくら人類が、大脳を膨らまし、他の動物と桁違いに進化したとか言っても、所詮は人類も野生動物の一種にすぎない。生き物を一つの言葉で括るなら、私は『縄張り争いをするもの』と言いたい。ここは、オレの領域だ！ 無断で近寄るな！ とする一家の「塀」の延長が、万里の長城なのである。

古来中国では、誇張や大ボラが好きなので、万里の長城は実際は2千400kmなのに、万里（ほぼ4万km・地球一周と同じ）と、でかくでる。白髪三千丈とく勦斗雲孫悟空飛びで十万八千里を行くという。即ち、月まで行って少し戻る距離だ。『法螺とミラツパは大きく吹け』というから、ま、愛嬌のある法螺なら、目くらまら立てる必要もなからう。

さてこの狭い地球上で、人類は無制限繁殖。人口過剰が戦争など諸悪の根源。国土の広さを考えず、人口増加に歯止めが利かない。特に都市には人口集中。立錐の余地もない。あたかも大自然を征服したかのごとき奢り様。平地は堆積物で地盤は脆弱。なのに盛り土などして宅地開発。チョット鯨のご機嫌が悪いと半壊・全壊の大目玉を食らう。地すべり・液状化現象など、ひどいものだ。『津波』なんか知れたもの：古老の警告などお節介な中傷ぐらいに受け止め、まず郷土の発展が第

一と一目散に驀進。かと思うと、世界各地で、水の都などと自慢し、低湿地帯を埋め立て、運河を巡らし、遊覧船が優雅に走る。このような文明を、私は「砂上の楼閣」と呼びたい。

そう言われても仕方がない証拠に、大都市の地下街や、地下鉄の繁栄。地下に潜ってまで、一極集中し、都市を繁栄しなければならぬのか？ 巨大地震や想定外の高さの「津波」の襲来は、どう克服するのか？ しかし、智慧あるはずの人間は、海抜の低い所に人があり、人家は密集する。確かに起伏は少なく、交通は便利である。噴火や土石流も無い。唯一、水害の恐怖だが堤防さえしっかりしていれば、大方、大丈夫！と、うそぶく。

【今回、宮古市田老地区の世界に誇る10¹の防

潮堤は、津波の高さが想定外とは言え、4¹も超え、全てを押し流してしまった。悪魔の爪痕は見るに忍びない。一方、姉吉地区で、『ここより低い所に人は住むな』という古老の言葉を信じ、周囲の反対を押し切り、昭和8年、15¹の堤防を築いた村長さんがいたが、今回、海岸に向いていた一人を除き、村人は全員無事であったという。

また宮城県の気仙沼市では、地震+津波+火災の複合災害となった。沿岸に石油基地があり、燃料タンクが2³基もあった。タンクの設定基準は地震に対しては厳しいが、津波については殆ど規制がなかった。それでも4¹の障壁で囲んでいたが、今回の津波は9¹であり、全てのタンクは押し流され、ドラム缶6万4千本分の石油が海面を覆った。がれき同士の衝突などで引火し、一面火の海となり、鎮火に2週間も要した。】

智慧あるはずの人間は、災害を「想定外」と言って逃れようとする。想定外は、無知か又は自然

の脅威を傲慢にも「見くびる」かのいずれかだ。あるいは、目先の利益が優先で、人命は後回しのパターン。東電の社長さんはオジギ草だ。

【東日本大震災は、強烈な複合災害であった。

①マグニチュード9の世界3番目の強震に相次ぐ余震。土砂崩れや家屋全半壊など多発。死者行方不明者計約2万8千人。②最高38.4メートル上がった大津波（明治三陸地震津波は31.4メートルであった）。③原発事故による放射能汚染（震災と合わせた避難民約13万6千人）。④竜巻も発生した。⑤生活必需品の物流ストップは即、死活問題だ。⑥風評被害は復興の意欲をそぐ最悪の状態。⑦そのため、外国人など観光客が7割も減った。更に避難民の間では、精神的ダメージに加え、⑧生活不活発病で、ケアが間に合わない。恐るべき複合災害だ。更に通信・交通の遮断。要介護者や病人・妊産婦などの医療受難。学童の授業問題。ライフラインのストップ、ガソリン不足など数えきれなかった。

そして何より被災地の人達を怒らせたのは、政府の⑨責任回避病。食べても健康に害はないが、放射能が基準値を超えた指定の農畜産物や魚介類は出荷停止。これは一体何を意味する？被害がないなら、なぜ出荷停止だ？責任を回避し、裏で逃げ回る国の意図がありありだ。

しかし、長年にわたる日本の国際協力の恩返しとして、実に多くの国々から支援の手が差し伸べられたことは本当に心を温めてくれた。特に一日1ドル以下で暮らすタイ国民が、120万円も義援金を贈ってくれた報道には、涙が出る思いだ。

更に、この度の強烈な震災でも、現地で略奪や暴動が起きなかった日本人の崇高な倫理観。世界からも、驚くべき立派な国民性として高く評価さ

れた。日本の治安と衛生の良さは世界一と言われるが、このような極限状態でも、それは守られている事が、この度、明確に証明されたと言える。そして人類は愚かにも、資源は枯渇するまで略奪。か弱い生物は、人間活動の環境汚染により、絶滅またはその危険種となるまで追いやられた。経済発展至上主義。わき目も振らず突っ走った近代文明。豊かさの過剰な追求は、人類を本当に幸せにしてくれるのだろうか？水や空気を汚染し、

自分の子孫さえ安住できない。それどころか、人類を絶滅危惧種の筆頭にまで陥れようとしている歪な近代文明の発展に人々は気付かない。奢れるものは必ず滅びるのが自然の掟。

今回の大震災は、今後、人類の「智慧」の進歩に、いかほど役立つか？今後どれだけ教訓として生かしていけるか。大きな試練である。被災地の皆様には真に気の毒だが、これは全人類に対する警告として、真摯に受け止めざるを得ない。

石原東京都知事の「天罰」論は、ある面、全人類に猛省を促した正当論と私は受け止めたい。一部の智慧ある者が、いくら警鐘を鳴らしても、世界各国が、また企業のトップが、経済至上主義なら智者の警鐘など、見向きもされない。それが、石原さんの「天罰」に直結したのであろう。

しかし、石原さんよ。自然災害の多い日本として、一極集中を避けるための「首都移転問題」には、絶対反対の御旗を掲げておられるのは、真に矛盾してはいませんか。4枚のプレートが、押し合いへし合いのこの列島において、今回のような超巨大地震が、いつ東京近辺で発生しても、おかしくはない。東海地方どころか、東京湾が震源ときたらどうしますか？全人口の1割強を集中して

いる首都圏に、あの巨大地震が今回並の津波を伴って襲来したなら、国家機能は完全にマヒするだろう。事実、今回東京は震度5強で、帰宅困難者は3百万人もいたという。それでも欲張って政治・経済も、教育・芸術も、何もかも東京に一極集中しなきゃいけないのですか？はつきり言ってそれは、無謀なエゴと言っじやないですか？智慧ある人間なら、危険は当然、分散するはず。

* * * * *

私は行政獣医師として動物の伝染病対策に一生をささげてきた。動物は一か所に多数集まれば、もし悪性の伝染病が侵入したら、オールアウト。利益追求のため、危険を承知で多頭飼育をする。多数集中するなら、それ相応の予防対策を講じなければ、とんでもない事がしばしば起きる。宮崎の口蹄疫。茨城の鳥インフルエンザなど記憶に新しい。多くの畜産家は、最初は基本に忠実に多くの経費をかけても、万全の対策を講じる。しかし、

そのおかげで「無事」が長く続くと、ついつい手抜きをするようになる。昔から言われるように、災害は忘れた頃に、ドカーンとやって来る。経営者は、腕も上がり、慣れてくると、つい基本を疎かにする。専門家の話など聞かなくなり天狗になる。財をなせば今度は権力が欲しくなり、政治などに色気を出す。当然、家畜の管理は手薄となり、基本を省略するようになる。すると、動物は率直に反応を示し、機能は低下し、病気で死なないまでも、生産効率は急に低下する。経営は自ずと左前に傾く。巨大な負債で、破産した例をいかほど見てきたことか。挙句の果ては、経営の悪化は、行政の対応が悪いからだ、責任を転嫁する（人もある。穀物をそのまま食べれば10人の人が生きら

れるのに、それを肉にすれば一人しか生きられない。家畜を病氣などで死なせることは、世界の食糧事情を乱す犯罪行為だ。

【何か事を為そうとするなら、当然自己責任で果たすべきこと。すぐ行政の支援を求めると、依頼心が強すぎる。自己責任に帰す事ができない悲惨な事例もなくはないが、行政に甘える体質が強すぎるのは、国や自治体の財政を圧迫する。】

動物の「何か所集中は、危険極まりないことだ。例えば、渡り鳥の鶴や白鳥などに餌付けをし、観光客を呼び、地元を活性化する：などとする例が処処に見られるが、これは悪性のインフルエンザなど蔓延しようものなら、大量死につながる。餌付けという「情け」が「仇」となる。野生の動物にむやみやたらエサなどやっつけてはいけない。人間が余計な手出しをしなければ、自然の中で適正に個体数が維持される。

都市に人口が集中することの危険性は、渡り鳥の例と同じ事。伝染病だけではなく、過当な生存競争からくるストレス過重。環境の汚染。心を癒す自然の喪失。程よい人口分散があれば、こんな悩みはかなり少なくなるだろう。人間に、本当に智慧があるのなら、人間も自然の一部に過ぎないことは、当然分かるはず。人間のささやかな智慧などでは、自然の猛威には到底勝てるものではないことぐらい、歴史がしっかり教えている。しかし奢り高ぶった人間は、事業を拡大し、公害をまき散らし、身の丈以上に勢力を広げる。当然そこに天罰が付け入る隙が生じる。

そして、自然には存在しない無数の化学物質で溢れんばかりのゴミの山。変な化学物質の垂れ流しで、水俣病をはじめ無数の公害が発生している。

そして変な化学物質の摂取により、生理機能が攪乱され、生殖機能を乱している。智慧あるはずの人類なのに、その未来は、恐怖の終末？

* * * * *

さて、今回の東日本大震災で、ライフラインがストップしてみて、しみじみ文明の利器にアグラをかけた愚かさ知らされた。寒くてストーブをつけようにも電気が来なくては、蹴飛ばしても火はつかない。誰に連絡しようにも、電話は通じない。情報を収集したくともテレビはダウン。辛うじて携帯ラジオのおかげで、事の重大さが分かった。ローソクで明かりを取るも、強い余震ですぐ火を消す始末。トイレも水がなくては流せない。断水で飲み水・炊事・洗面・入浴など日頃無造作に乱用していた水の有り難さを感じさせられた。交通機関は動かず。在来線復旧には多くの時間を要した。特に津波をモロに受けた常磐線は、復旧のメドがまだに立たないという。

しかし新幹線の脱線転覆が1両もなかったのは、本震の前のP波をとらえ電源を切り、各走行列車が非常ブレーキをかけ、自動停止ができたからだという。300kmで走っていて、いきなりあの強震ではどうなることか。さすが世界一の新幹線。

ガソリン補給は長蛇の行列。食べ物底をつき、スーパーの売り場は空っぽ。本棚は無残な姿。積んどくの祟り。筆筒の中身は、どんな大泥棒が荒らしまくったかというほどムチャクチャ。食器棚はガラスや瀬戸物の破片で近寄れない。屋根瓦は勿論、大谷石の塀や墓石はゴロゴロ。神社の鳥居も、笠木や貫（ぬき）がゴロゴロ。恐れ多くも、先祖の位牌は、部屋端に吹っ飛んでいた。

* * * * *

さて本論。70億の人口が贅を極める。皆が暖衣飽食とまで言わなくとも、人並みに衣食住の満足を求める。政治も経済も国民の安寧を求めて、より豊かに、より安定した居住環境を求める。他を見渡し、近隣のライバルには負けたくない。競争原理が働き、勤勉努力、創意工夫を重ね、経済を活性化させ、エネルギーを浪費し、資源を枯渇するまで消費し尽す。一方、国家の活力は、先ず人口増と、無制限繁殖。国土が狭くなれば、弱そう

な適地を求め侵略に走る。人類は愚かな歴史を、性懲りもなく何度でも繰り返してきた。大航海時代の到来。活発な植民活動。21世紀を迎え、ついには宇宙にまで、その目を向けようとしている。前月号で書いた他の惑星にまで足を伸ばそうとする人類の欲望には、際限がない。

結果はどうなる？ 環境汚染・資源枯渇・自然破壊。憂慮すべき化学物質の氾濫により、人類の総活力の低下。更には、自暴自棄的な薬物汚染やモラルの破壊。挙句の果てには、略奪・殺人・戦争などに発展、正に末期的症狀だ。

飽くなき欲望の追求。地球の広さが倍あっても足りない勢い。小さな島でネズミが増え過ぎ、餌を食いつくし、新天地を求めて一斉に海に飛び込み、絶滅した話と同じ。智慧有るはずの人類が、今、同様の末路を辿ろうとしている。知ったかぶりをして、大袈裟なこと言うなど言われるかもしれないが、人類の知恵も知識も万能ではない。人類自らの奢りからくる滅亡へのストーリーの他に、マグマの同時多発大噴出やら、確率は低いにしろ、小惑星の飛来衝突やら、超悪性伝染病の世界的大流行（パンデミック）など、人知の及ばぬ恐怖のアクシデントは、いくらでもあ

人類の智慧は永遠に不滅だ。文明はまだまだ発展の余地がある。繁栄こそあれ、衰亡などあるはずがない……とするのは甘すぎる。智慧あるはずの人類なればこそ、そこは早々に気づき、今からでも遅くはない。ここは叡智を絞って、背伸びをした経済活動を、適正に自粛し、活路を開かなければならない。

余分な浪費は控え、環境保全に心し、限られたスペースで、つましく生きる者こそ、未来をしっかり見つめた「智者」と言えよう。

石岡雛巡り二〇一

兼平ちえこ

今年で五回目を迎えた石岡雛巡りは二月十二日～三月三日まで行われた。一〇一軒の参加店でそれぞれに、思い思いの物語をお雛様に託して飾りつけられた店内はまるで劇場のように華やいていた。しかし、八間道路、中町通り、香丸町通りの商店街通りには、花の飾りも目立たず、ひっそりと静まりかえって、寂しさが感じられたスタートであった。昨年の懐かしのボンネットバスの運行ではじまった賑やかさと比較してしまうのでした。

それでは、ここから雌雛・雄雛達の展示された主な大舞台の拝見としましょう。

「おかえりなさい、かぐや姫」と題した、まちかど情報センターの舞台は、巨大な和紙であしらった龍を伴ってかぐや姫が牛車での石岡への帰還の様子であった。千年の昔、叶わぬ想いに嘆き悲しんだ男たちも、姫との再会に胸躍らせる。しか

し、姫の運命は……との演出であった。

そして、次なる雌雛・雄雛達の大舞台は、初めの場所、石岡市役所入口広場に繰り広げられた。題して、「宇合と虫麻呂」、遠く万葉の昔、新しい常陸国の国司の一行を乗せた船が高浜へと向かう。国司の名は藤原宇合。宇合は、都で絶大な権力を誇る藤原不比等の三男である。常陸国風土記の編纂では、随行した文官高橋虫麻呂とともに中心的役割を果たしたと言われている。虫麻呂は、歌詠みの才能を発揮し、筑波山を詠んだ歌は万葉集にも収められている。都の人々も筑波嶺を詠んだ歌から緑豊かな常陸国を憧憬し「常世の国」と呼ぶこともあったという。こうした国司着任の様子を、大きな船の入港の様子を通しての表現であった。ところでここには昨年「防人・還る」で釣り人を演じていたお雛様は今年もまたそれを演じきっていた。そして、酔っぱらいを演じたお雛様は、今年もまたそれを演じ、その姿も板についていた。さらに、もう一か所の舞台を拝見してみましよう。

常陸国府館である。「小町百年の恋」と題して、千年以上前の石岡、その昔、常陸の国の国分寺には七重の塔があったと言われている。その七重の塔の中からお雛様がオペラの観劇をしている様子。オペラは一夜限りの野外オペラハウス、場所は今の尼寺が原あたりでしょうか。

いかがでしたでしょうか、皆さんは今年のお雛様の大舞台を拝見しましたでしょうか。その他参加された店主さんの工夫によって、お雛様達が歴史の里石岡を盛り上げてくれていた。更に歴史の里に華を添えた、常陸国総社宮の社宝公開、雛巡りでGO！（クイズラリー）、そしてルネッ散歩。

この中で私は雛巡りでGO！で雛巡りクイズ出題のお手伝いをさせて頂いた。店内に貼られた問題を解きながらの雛巡りである。Aコース（展示店の中から）。Bコース（展示店に加えて、総社宮・民族資料館）いずれかを選ぶ。親子、婦人グループ、夫婦連れと約五十人余りの皆さんが楽しんだ。しかし、問題が難しい割には参加賞が質素ではないか？とのご意見もあり、来年は町内のPRを兼ねて、各商店ご自慢の商品を取り入れてはいいでしょうか。

また、二月二十日に行われたルネッ散歩に参加。今注目されているパワースポット巡りであった。

自然および人間の歴史が詰まった所には、歴史的な営みが現れて、そこにパワーを感じることが出来るスポットが多いという。石岡は全てパワーのあるところと言えるでしょう。

国衙跡、総社宮には枯れたことのない御手洗井や火災にもめげない古木、国分僧寺跡、国分尼寺跡、八幡太郎のパワーを感じる若宮八幡宮、天照大神とウガヤアエズノミコトを祭神とする青屋神社、国府三光の一つ星の宮、古代道路の駅家があり駅鈴を保管していたと推定されている鈴の宮稲荷神社と大いにパワーを欲張ったルネッ散歩であった。

どうぞ来年の雛巡りにも、展示された店主さんのお気遣いや各町内会での温かい飲み物・食べ物・サービスの携わった役員皆さんのご苦労、そしてお雛様たちのおもてなしに感謝しながら多くの皆さんに楽しんでいただきたいと思いました。

・ 幸せの鐘 届け被災地へ
どうだんつつじゆらす

ちえこ

身から出た錆になるな

伊東弓子

韓国に嫁いだ娘のところへ手伝いで出かけたのであったが、東北関東大震災によって、二週間帰るに帰れず足止めをくってしまった。

テレビのスイッチを入れれば大震災の様子や福島原発の報道が流れてくる。その他に日本のニュースとして富士山のこととか石原都知事のことなどいろいろ報道されるのだが、茨城県のこととは全く報道がなかった。不安で仕方がなかったが、四、五日は電話も通じず、状況を全く知ることが出来なかった。韓国で知り合いになった人が励ましてくれたことが何よりもの慰めだった。

津波に流されていく様子。引き戻されて山積みになった様子。家、車、生活用具全てが塵となった。一つ一つが生活の中で生かされていた物。今はその機能もストップし何の役にも立たない物となった様に見える。その量の多いこと。この山の大半は人が人の為に拵えた物だ。

こんな大きな災害の中でふっと自分を取り巻く物の事を思った。自分はどうだ。塵の中にいるんじゃないか。帰ったら片付けを始めよう、と焦る心の中に「亥のさん」のことを思い出した。亥のさんのようにはなれなくても今迄の自分を振り返って、相当の覚悟をし自分自身を荒療治していかないと身ぎれいにはなれないだろう。

学生の頃迄は整理整頓はよく出来ていた。仕事を始めた頃から処理する力が欠けてきた。

結婚後の三ヶ所での生活には力の限界を物ともしないで、彼方へ押っつけ、此方へ押っつけやってきました。その頃父だけが無言で手伝ってくれた。社宅住まいの時塵の始末には苦勞した。隣常会の

塵置場は坂下迄行く、遠い事も然ることながら「置かせて貰う」事に随分遠慮もあった。夜運んだり息子達に頼んでリヤカーで塵処理場迄持つて行って貰った。辛かったろうがよくやってくれた。

社宅を移るといので今必要でない物は、石岡の友人宅に頼んだこともあった。

火事のある度に塵の話してもよく耳にし、「気を付けないといけない」とは思っても実行しなかった。訳だ。

老支度をしなければと六十歳の時心に決めた。子供達に塵の片付けをさせる様ではいけないと思つた日もあったのに結局は手伝つて貰うはめだ。

その時その時は心にあつても実行が伴つていなかった。無駄な物は求めない様にきた積もりだが結局は整理する能力のなさからくるものだ。物の命を生かす事、工夫して利用する事の為に集めておいたり、想い出や頂いた物も大切にしたいという気持ちだったが、それは優柔不断で自分の成すべき事を後回しにしてきたことに他ならない。

今の生活と違う五、六十年前なら「亥のさん」のような人は沢山いた。生活様式も違うといわれればそれまでですが、私の幼い日に家族と同様に生活してきた人なので、教わつたことも多い。

亥のさんが亡くなったのは八月四日の朝だった。母の声に行ってみると体には温もりが残っていた。枕元には一口齧つたさつま芋が転がっていた。部屋の角には冬布団がたたんであり、柳行李にはシヤツ、手拭、半天、新しい草履、たもんびきが入っていた。結婚を三日後に控えた私に友が祝いの会を持ってくれるというので夕べ出かけた。その際声をかけて出かけた。

「成就院に入ってくるね」

「うん、きつけてな」

と分れたのだ。それが永遠の別れとなった。

亥のさんは本堂の西側の部屋にいたが、それは夜だけで昼は殆ど母屋にいた。体は細く背が高かった。シヤツと半天、たもんびき、草履、冬は綿入れ半天、足袋、醬油で煮出したような手拭を腰に下げていた。頭は殆ど髪の毛はなかったが、時々母がバリカンで刈っていた。髭は自分で剃る、顔を洗う時も頭まで洗うのが常で、齒のない口もよく漱いでいた。生水は飲まず白湯を茶釜からくんでいた。こぼさずぱりしている人だった。「番頭さん」と呼んでいた。井に麦飯をつめ、味噌汁をかけておかわり二杯、食糧難の時もそれだけは続けてあげたと母は言う。おかずは柔らかい物を口に入れていた。仕事はあまり好んでしなかった。伯母が怒りながら言いつけていた。庭掃き、草取り、片付け等だが長続きしない。その様子に伯母は時々脅しをかけていた。

「やんねえと父ちゃんに言いつけてやっかんな」
という事を聞いたかどうか。ある時、時雨がきて乾いてあつた豆が濡れて、帰ってきた父に叱られている二人を見た事もある。

一番の大仕事はお葬式に行く坊さんのお伴をする事だった。当時照光寺の十倍も大きい円妙寺さんはお葬式の度に「お伴をお願いしたい」と年老いた任職が来られた。次の朝は落着かずそわそわとしながら「どうもここ二、三日鳥の鳴きが悪かった。やっぱりじゃーぼになつたんだ」と聞かせてくれた。朝食の後、外出用の半天と草履をはいてにこにこ元気に出かける。時間には墨染めの衣の住職の後から式用の衣、仏具を入れた箱を担いで着いていく。帰りは円妙寺さんでお茶をよば

れて帰ってくる。お葬式から帰ってくると蓮の花の塩釜の菓子を必ず私達姉弟にくれた。優しさが伝わってきたし楽しみでもあった。亥のさんがお伴をしていく一番の楽しみは「馳走をよばれる事だったようだ。勝手場から庭迄広がって作っている女達の所へ行って「大げさおくれ」というと「ほーらほれ、大げさ残飯ほおりこめ」といつて焦げ飯のでっかい握り飯をくれたそうだ。当家の悲しみ等どこえやら大声で大笑いしながら、汁やおかずもくれたようだ。半分以上はからかわれながら（馬鹿にされ）楽しかったんだと思う。私も部落の手伝いをした時「亥のさんはあつちの方は役に立たないようだから安心だな。俺げさもこうよ。いつでもごつつそうすつと」「おめえ、子供がいたつちゅうけど亥のさんの子供かどうかわかんめえ」とみんなで大笑い「うん」と一緒に笑っていた。人の噂さ話などしない人だった。想い出話にはよくしてくれた。「若い頃玉造の祇園に行った」と懐かしそうだった。悔しい事もあったのだ。夜外に出て大声で怒っている事があった。「大げさ大げさって馬鹿にすんな」「何も悪いことはしてねえ」など何回か聞いた事があった。辛い気持ち、悔しい思いも沢山あったろうにと偶に見た眼光の鋭さを思い出す。伯母が亡くなった後、無花果の枝にかけてある伯母の半天に水をかけるようすが何日か続いた。その時亥のさんは「かんかちゃんも三途の川は渡ったかな」「父ちゃん母ちゃんのことさ行って喜んでっかな」「かんかちゃん悪いことしなかつた人だから、極楽へ行けたっぺな」私に「そうね。番頭さんもいい人だから極楽行けるよ」とすると「そうかね」と笑っていた。亡くなつて四十四、五年経つ、偶に「大げさは何処に住ん

でたんだかな」と話題になる。無能とか価値もないといった人がいたが私は亥のさんからいろんな事を受けとつた。

思い上がった人間がコンクリートで埋めつくし、地球が息苦しがついていないだろうか。こういう言い方をしては災害を受けた地域の方々には申し訳ありませんが、人間が人間の為に造って使ってきた物だから人の手で丁寧な片付けなければならぬと思う。私も時代の奢りに負けず生きていかねばならないと改めて思い、尻ぬぐいの毎日に精出している。

まず周りの塵に埋もれないように、奮闘している。低下する体力を護身していく事で、やがて周囲は護美の園になるだろう。

旅に行こう

小林幸枝

ことば座6月公演の脚本「流海の舞」の舞詩に「言葉の旅」を詠った詩があります。舞詩の言葉の旅は、愛を語るための言葉を探しに言葉が旅に出かけます。そして、旅に出た言葉は新しい物語となつて帰ってきます。その物語は愛をささげるための物語です。

舞歌を読みながら旅を考えていたら、旅というのは必ず出発点に帰ってくるもので、出発点に帰ってこないのは旅ではなくなり、家出とか脱走になつてしまうのだ、という事に気付いた。出発点に必ず帰ってくるのが旅なのだから、私も旅に出ようと思いついた。

6月の公演が終わつたら何としても旅に出よう

と心に決めた。できたら一か月近く出かけてきたものである。何処へ行くかなどはまだ考えていない。

自然と歴史的物語が沢山あつて、あまり人の多くない、かといって淋しくもなく何か神秘的な雰囲気のある処はないだろうか。そんなところでゆっくり時間を過ごしながらか、自然のパワーをもらつて自分のイメージ力のアップを図ってきたい。ちよつと欲張り過ぎかな。でも、旅というのは出かける前の、こんな夢作りが一番楽しいのだ。どんな素敵なところでも、実際に行つてしまつたら「ああそうね」と、期待外れではないけれど計画している時ほどの感激や感動はない。

思うところがあつて、昨年6月公演の後から休みなしの感じに仕事をしてきた。一寸気分的な疲れも出てきたところなので、リフレッシュする時間を作りたいと思つていたら、ちょうど今度の6月公演の脚本に新しい言葉を、新しい物語を作るために旅に出る、という舞詩が書かれていた。それで、読んですぐに決めた。旅に行こう、と。

6月の公演では、モダンダンスの柏木久美子さんが共演してくださることになり、私にとつて大きな転換の出来るチャンスが来たのかなと思つています。先日、公演の全体打ち合わせがあつて、柏木さんからの提案で、一部、手話の舞を離れて二人で形を考えない自由な感性の流れを表現する舞をしましょう、ということになりました。

今度の公演で、柏木さんの力を借りて、私の新しい可能性を探れることを大きく期待しており、その可能性を持つて、舞詩の言葉の旅と同様に、旅に出て新しい物語の表現できる自分を見つけたらと思つている。

【特別企画】

虚構と真実の谷間 打田昇三

第二章 罪のある名声（後編）

第一次将門ブームの当時、私は将門に関わる場所での人が行かないようなポイントを探して回った。既に述べた東石田（ひがしした）旧・明野に在る平国香館跡や下総国旧国府跡（将門生地）、将門の前線基地が在った鎌輪など一般の観光では回らない場所である。中には、平将門が馬を繋いでいた大きな石が残っていた筈なのに見つからないので農家のおじさんに聞いたら「田圃の作業で邪魔だから捨てた！」と言われたりした。

その一つに個人の家の墓があったので、そこは史蹟でも名所でも無く地元の観光案内にも記載されて居ない普通の墓地であるが、先に述べたようにその家の代々の当主が一千余年に亘り大切に護り通してきた「平将門と正室・君の前の墓」と伝えられているものである。

私は、その所在を或る小規模なガイドブックで知り勝手に探し回っていた際に現地で偶然に会うことが出来た当家の御隠居から「…四基並んだ五輪塔のうち、中央二基が平将門と正室・君の前の墓と言われる。両側はそれを護る先祖のもの…」と教えられた。手入れが行き届いた小さな墓所にひっそりと祀られた様子を見て、それは最も平将門の墓に相応しいと、感じたものである。

現在は市町村大合併で名称が変わってしまったけれども、当時は真壁郡大和村大字大国玉宇三門（やまとむら・おおくにたま・みかど）と言う加

波山の北西にある地域がその場所である。「三門（みかど）」の地名は、かつては「御門」「公帝」とも書いたそうで、桓武天皇五代の孫である平将門が自らを「新皇」と称したとする俗説の根拠にされそうな名称であるが、将門に代わって言い訳をさせて貰えば、地名は此の地域に延喜式内社の大国玉神社が祀られていることに由来する。

大国玉神社は、大和三輪山龍神伝説を伝える石岡の村上神社が正五位を貰った年代より五十年も前に霊験大なりとして官社に列せられた常陸国二十八座の一座である。祭神は大国主命（おおくにぬしのみこと）と建甕槌命（たけみかづちのみこと）である。この神社は村内を中心に多くの神領を有していたような立派な神社であつたらしい。

近くの木崎（きさき）地区には、かつては境内社であつた小さな后（きさき）神社が在り、須佐之男命の娘で大国主命の奥さんになつた須勢理毘売命（すせりびめのみこと）を祭神としている。

后神社には御神体と伝えられる木彫りの古い女性像が置かれていて、当然ながら須勢理毘売命が祭神であるから御神体は須勢理毘売命である筈なのだが、その服装が藤原時代のもつと言われる。

いくら女性の神様でも神話時代に平安ファッションを先取りすることはしないであろうから、この像には何か謂れがある。地元の専門家が調べたところ、一キロほど東北の羽田地区に常安寺という古いお寺があり、明治時代の初めに廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）や天皇制強化の為に仏教弾圧（はつてつてんげい）によつて廃寺にさせられていた。

常安寺そのものは、光明皇后が安産祈願をしたとして天皇家からも祈禱を頼まれる雨引山楽法寺に併合されたが、御本尊の阿弥陀如来像は「要ら

ない」と断られた。楽法寺は雨引観音として信仰される真言宗豊山派の寺であるから観世音菩薩がお居になり、さらに「恋愛・煩惱の愛染明王」画像が有る。そこに阿弥陀様を入れると、御本尊同士で恋愛をされても痴話喧嘩をされても困るという浅はかな人間の判断によるのであろう。

阿弥陀如来は住む所を失い困っていた。それを信仰心の厚い村人が見かねて常安寺跡にお堂を建て、長年に亘り護っていた。その阿弥陀様は背中に「光背（こうはい）光明を表わす飾り」を付けており、その銘に天慶元戊戌（九三八）石岡が将門に焼かれる前年、真壁羽田村が阿弥陀一仏を寄進し奉る。願主平親王将門后の持仏也。などと書かれているのが見つかった。白蟻に喰われてはいたが辛うじて解読した結果から大国玉地区は平将門夫人「君の前」の出生地であり、后神社の御神体とされてきた女性木像は、承平の乱で平良兼軍に捕らえられ惨殺された「君の前」であることを立証したのである。このことは水戸の県立中央図書館が蔵する「真壁郡郷土史」に収録されており、赤城説でも触れている。

さらに「君の前」の存在が明らかになつたことで平将門事件の闇の部分、将門記の冒頭に大きな欠落が有つて「…聊か女論に依りて、舅甥（おじおい）の中既に相違う…」とした平良兼と平将門の間に起こつた「女論」についても、後で述べるような事態の推測が可能になつてきた。

それらのことを踏まえて、同一地域にある個人の墓地に「平将門と君の前」の墓とされる五輪塔が、両脇を家臣に守られる形で一千有余年も密かに存続してきたという事実は極めて重要である。この墓地のことを記録した史料は無いに等しいが、

「将門記」には平将門の領地であったと推測できる大國玉郷に關連のある武将、つまり江戸時代の代官に相当するような人物として「平真樹（たいらのまたて）」を登場させている。

「然る間、前の大掾源護が告状に依りて、件（くだん）の護並びに犯人平将門及び真樹等を召し進むべき由の官符、去（い）ぬる承平五年十二月二十九日の符、同六年九月七日に到来、①左近衛の番長（つがひのおさ）正六位上英保（あぼ）純行、同姓氏立、宇自加支興（うじかのともおき）等を差して、常陸・下野・下総等の国に下さる。仍て（よりに）将門は告人以前に、同年十月十七日、火急に道に上る：」（注①御所を警備する役所から臨時に命じられた役人、下級役人ではあるが、この場合は常陸大掾よりも官位が上である）

意識すると「前の常陸大掾職にあつた源護が京都へ告訴状を出したので、原告人の護と被告人の将門及び平真樹らを召喚する公文書が承平六年九月に届いた。下級官僚の英保純行らが派遣されてきて常陸、下野、下総の国府を回り、そのことを達して回った。そこで平将門と平真樹は（…原告側が裁判官を買収したりすることを防ぐために）源護らより先に地元を發つて京都へ向かった」

源護は、事件の発端となつた「将門待ち伏せ事件」の失敗で三人の息子を無駄に死なせている。平国香と共謀して将門を亡きものにしようと企んだが味方がコテンパンに叩かれてしまったから悔しくて仕方がない。しかし手も足も出ない。そこで国香の異母弟であり、自分の娘婿でもあつた平良正を呼んで「何とかしろ！」と命じたのである。

「貞盛、情ら（つらつら）案内を検するに、凡そ将門は本意の敵に非ず。斯（そ）れ源氏の縁坐

なり。諺に曰く、賤しき者は貴きに従ひ、弱き者は強きに資（よ）る、と。如（し）かじ敬順せんには。苟（いやし）くも貞盛守器の職に在り。須（すべから）く官都に歸りて、官勇を増すべし。

而して嫡母（そうぼ）堂に在り、子に非ずは誰か養はむ。田地敷あり、我に非ずば誰か領せむ。将門に睦びて芳操を花夷に通じ、比翼を國家に流（つた）へむと。仍て具（つづさ）に此の由を挙げ、慝（ねんごろ）にせむこと斯れ可ならむ者（てへり）——乃（すなわち）対面せむと擬（す）るの間、故上総介高望王の妾の子平良正は亦た将門の次の伯父なり。而して介良兼朝臣と良正とは兄弟の上に、両ながら彼の常陸前掾源護の因縁なり。護は常に子扶・隆・繁等が将門の為に害せらるるの由を嘆息す。然れども、介良兼は上総の国に居り、未だに此の事を執らず。良正独り因縁を追慕して、車の如く常陸の地に舞ひ廻（めぐ）る」

意識すると「都から戻つていた貞盛は、父親が死んだ経緯を考えて、これは将門が一方的に悪い訳ではない——争いのもと源氏にあり、平家一族は、その縁によつて争いに巻き込まれたようなものである——と覺つた。諺にも『身分の低い者は高貴に従属し、弱者は強者に頼る』と言う。現在の自分は都で官職に就いているのであるから、私的な争いに巻き込まれておらず、復職して公務に戻るのが良いと考えた。しかし、此の俣の状態では母親や領地のことが心配なので、ここは将門と和義を結び、出来てしまったことは水に流そう…と自分の考えを纏めた手紙を将門に送った。（前段）

貞盛と将門が会谈をする段取りが進んでいた頃に、平高望の妾腹の子（良兼の弟で貞盛と将門の叔父）の平良正は、良兼と同じく源護の娘を妻に

していたので護に泣き付かれ将門を討つ手配を始めていた。良兼は上総国に居たので良正だけが常陸国内の親戚・縁者を回つて味方を募つていた」

良正は未だ無官で領地だけは父親から貰い、現在のつくば研究学園都市北端にあたる水守小学校付近に館を持っていた。私が見た当時は厩の跡が残されていた。源護が将門らの告訴状を出すに至つたもう一つの理由は、この平良正の浅はかな行動にあつたので「川曲（かわわ）の合戦」と呼ばれる承平五年十月二十一日（最初の合戦から八か月後）の戦いで、良正は折角集めた味方の中から六十余人を失い、源護の期待を大きく裏切つた。性懲りも無く良正を焚きつけて、将門を討たせようと図つた護の計画は又も失敗したのである。

ところが、これに懲りない良正は舅の源護に怒られることもあつて、兄の良兼と甥の貞盛に応援を求め連合軍を結成して下野国で再度、将門を攻撃し、又も見事に負けたのである。この時に将門は良兼を見逃している。こうして、身内の小さな争いであつたものが、源護及び平良正という二人の愚かな人物に依つて徐々に拡大されてゆく。

平良正の領地は旧・鬼怒川を挟んで将門の領地に接していた。庶出の末っ子と言われるから、相続した領地も少ない。官職にも恵まれない。隣の芝生は立派に見える。異母兄である将門の父・良将は優れた人物であり、父親に信頼されて官位も高く、貰つた領地も多かつた。それを将門がそっくり相続した。良正が義父の誘いに乗つて将門を討てば柵から巨大な牡丹餅が落ちてくる…しかし良正は何の足しにもならなかつた。源護は国香と自分の被害とに良正、良兼、貞盛らの負け分を足して、将門と真樹を罪人にしようとするので

である——将門らは無罪になるのだが：

それはそれとして赤城宗徳説では、被告にされた平真樹が将門の客分の武将であり、大國玉地区一帯に広がっていた将門の領地（父親の遺産）を管理していたと推定している。平の姓からすると桓武平氏一門のようにも思えるが詳細は分からない。そして真樹の娘が将門の正室となった「君の前」であり、やがて敵に惨殺される女性とした。大國玉地区に千年守り続けられている将門の墓に眠るのがこの女性なのである。

気の毒な女性のことは話の展開の中で紹介できるが、ここは敵対した平将門と平国香との墓の話に続くことなので、その結論を急ぎたい。真壁郡大和村大字大國玉字三門地区に残る平将門の墓と言われる四基の五輪塔のうち、両端の二基は中央の二基より小ぶりだが向かって右が少し大きい。では、これは誰の墓なのか、私は「君の前」の父親・平真樹のもとと推定した。そして左端にある一番小さいものは最後の合戦まで平将門に従っていた平真樹の家臣である当家（仮にA家とする）の御先祖が、死して後も主君らを護り抜く墓石である——と勝手に推測している。

平将門の没後、千年はとうに過ぎた。その墓地は今もって手入れが行き届き大切に管理されていることが分かる。そこには理論や学説を越えた人間の真心、精神の本質が実感できる。墓の謂れについて諄々と説いてくれた御隠居の風貌には古武士の佛が偲ばれた。飽く迄も私見であるが、Aさんの名字の響きから御先祖として将門軍の武将「多治経明（たじ・つねあき）」を連想する。

前太平記によれば、平将門軍が行った最後の合戦において、搦め手（裏側）の敵を防いでいた多

治経明は、その日、二十度の懸け合いで手勢の殆どを失い自分も少し傷を負った。残る部下は十七騎しか居らず、今は好い敵に出会うことも叶わぬと自害を決めた。将門の本陣に行つて「諸方の攻め口は皆破られ、兵の大方は討ち死に致した。敵の大軍が近づかぬうちに殿も御自害なされよ。経明が御先に参つて死出の旅路のご案内をつかまつる……」と言いつつ鎧・兜を脱ぎ棄て、腹一文字に掻き切つてから、その太刀を将門の前に置いてうつ伏せに絶命した。十七騎の家臣たちも陣幕の前に並び、刺し違えて後を追つた。

これを見た将門は涙を堪え「詮なき者共が死に様かな……敵の五百や千を斬つてから、良き敵と刺し違えて冥土の案内をさすべきものを……」と、最後の手合わせに乗り出そうとした。そこに誰が放つたか風に乗つて飛び来たつた一筋の矢があり平将門は眉間を射られて波乱の生涯を終えたのである。この時の多治経明の切腹の様は、武士の最後の典型として平将門の死に置き換えられ、宮内庁が蔵する「秀郷草子」に「武者の切腹」として描かれていると言う。

多治氏からは、尾張国の豪族で「真人（まひと）」の姓（かばね）を貰つた「多治比一族」が想起される。桓武平氏の始祖・葛原親王は桓武天皇を父とし、参議・多治比長野の娘・真宗を母として生まれた。「幼にして才名あり」と称讃される優れた人物であつたが、藤原氏の血筋では無いため天皇にはなれず親王としては最高位の一品（いっぽん）に叙された人物である。

平将門の陣中であつて武士の鑑とされた多治経明が多治比氏の子孫かどうかは個人的な推察の域を出ない。しかし平国香を頂点とした常陸平氏の

一族は、紛れも無く桓武天皇と多治比氏の子孫である。その同族が常陸国を戦場として骨肉の争いを展開し関東一円を戦火に巻き込んで罪なき多くの人々を苦しめた。これは許し難いことである。

「罪と罰」の原則から言えば、争乱を企てた責任者に死後の安住の場所「墓」が与えられなくては当然と言えるかも知れない。しかしながら一族の争いから発展した平将門の蜂起が天皇を頂点として栄耀栄華を極める藤原政権への抵抗であると見る見方もある。従来の歴史では「天皇に対する反逆」として簡単に片付けられていた争乱の発端について「なぜ起きたのか」「それがどうして国家的な反乱に拡大したのか」を考へることが「歴史の嘘」を暴くことになる。現代にも静かに続いている「平将門鼻唄（ひいき）」の根底には、長年に亘り「歴史の嘘」を強制されてきた国民の大いなる疑惑と反発があるのかも知れない。

既に紹介した赤城宗徳説にもあるように「承平・天慶の乱」の根底には領地を巡る同族の争いが根深く存在していた。そのことに触れる前に、物語の発端とも言える桓武天皇の曾孫である高望王が、平の姓と従五位下の位を貰い常陸国の大掾職に任じられ（兼ねて上総介に補され）て遙々と関東へやつて来た——という経緯について考へてみなければならぬ。

一見して何の疑問も無いように見えるが、高望王の父親・高見王は、評判の良かった葛原親王の子に生まれながら平家物語にも「かの親王（葛原親王）の御子高視（見）王、無位無官にして失せ給ひぬ……」とあるように居候の身で終わった。

歴代天皇の皇子で天皇になれるのは一人であるから不遇の皇族が多いのは致し方ない。葛原親王

の兄弟で天皇になれたのは、母親が藤原氏である平城（へいぜい）、嵯峨、淳和（じゅんな）三天皇に限られた。それぞれの天皇に子供が居り、嵯峨天皇などは男児だけで数十人と言われているから先に述べた源護のように製造番号が不明な子孫も出てくる。官位を得たり官職に就いたりするのも「狭き門」になる。母親が藤原系ではない皇族にとっては尚更のことである。

そういう時代になぜ無位無官で終わった高見王の子・高望王が突如として高待遇で地方高官に迎えられたのか？その時代は東北地方から波及した反乱で関東地方が騒がしかったことも理由に挙げられているが、別に高望王でなくても良かった。既に桓武天皇から六代目の宇多天皇の治世になる。このことに触れている史書を見ないが、私は宇多天皇の強い意図に依る抜擢と推定した。そして承平・天慶の乱では、平将門が皇位篡奪を図ったとされる話もし事実とした場合の動機として、やはり宇多天皇の即位の事情が将門の脳裏にあったと考える。

自分も宇多天皇も皇統の端に連なる者：臣下に降った皇族でも宇多天皇のように皇位を継ぐことが出来る。桓武平氏である自分にも近隣を従える実力さえあれば、それが不可能では無い―将門はそのように考えたのであろう。話が少し横道に逸れるが、争乱を起こした平氏一族の常陸国進出に關わる基本的なことで、あまり知られていない内容なので桓武平氏抜擢の経緯を述べておきたい。

世の中が急速に進んだ現代では「紅白」の区分など頭の固いNHKぐらいしか使わないが、昔は何かにつけ赤の平氏、白の源氏を念頭に置いた行事が行われていたものである。そのことから一般

には「平氏Ⅱ赤の旗印、源氏Ⅱ白の旗印」としてイメージが定着しているけれども、それをういたのは桓武平氏と清和源氏に限られていて、主に武力を以て朝廷に奉仕する暗黙の任務が旗印に示されているのである。特に清和源氏などは平将門事件の際に、旗印が決められ任務が示された。

平氏も源氏も、その時々天皇が子孫を皇族の籍から外して臣下に降す際に「姓」として与えたもので、源氏には二十程の系統がある。最初にこの制度を始めたのは嵯峨天皇であり、何とも皮肉なことだが、平将門事件の陰の犯人とも言うべき源護は嵯峨系の源氏であろうと推定されている。そして仁明天皇、宇多天皇など多くの天皇が自分の子供を源氏にしているが一般に源氏と言えば源頼朝に代表される白旗の系統が知られており祖先を清和天皇として「清和源氏」を称している。

しかし、この系統は実際には清和天皇の第一皇子であった陽成天皇が源氏の祖先であると公然の秘密のように言われているのである。なぜ陽成天皇ではないのか：一口で言えば、この天皇がマトモな人物では無かったからである。

その頃から藤原氏が天皇を傀儡（かいらい）操り人形）として専制政治を行う形が出来上がったために、怪しくも天皇は天皇として祀り上げられていたから子孫も残る。そしてスキヤンダルは正確に世間に伝わるから、子孫は苦肉の策で先祖をずらす操作が行われたのであろう。

陽成天皇が即位したのは九歳の時である。在位期間は十年に満たなかったが天皇長寿番付のベストに入るほど現代人並みの長寿であった。その長い生涯の短い在位期間に数々の乱行を犯したのである。通俗史「前々太平記」や「歴代天皇総覧」

東北関東大震災被災地 及び 被災者の方々へのお見舞い申し上げます

未曾有の大震災のため、ギター文化館では3月13日から、'11年のコンサートシリーズをお休みさせていただいておりましたが、4月24日の莊村清志ギターリサイタルから再開させていただきました。どうぞよろしくお願いたします。（開場PM2:30 開演PM3:00）

5月22日(日) マリアエステル・グスマン ギターリサイタル
5月28日(日) マリオ鈴木 ギターリサイタル
5月29日(日) 大島 直 ギターリサイタル
6月12日(日) 高橋竹童【Trinity】津軽三味線コンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
☎0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工藤オカリナアートJOY

母なる大地の音(オカリナ)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。
あなたの家の庭の土で、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作
オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

などによれば、先ず元慶六年（八八二）に宮中で殺人事件が起こり、陽成天皇の側近（天皇の乳母の息子）が殴られて死んでいた。犯人は不明とされたけれども現場に居たのは被害者と陽成天皇の二人だけであった。そうなる名探偵や敏腕刑事を呼ばなくても犯人は分かる。

その後で宮殿の庭に馬が飼われていることが分り、調べたら飼い主は天皇であった。その馬に乗って天皇が宮殿の廊下を駆け巡り、これを制する者は斬り付けられたり蹴られたりした。何か気に障ると急に怒り出し、女官を裸にして庭樹に縛りつけるなど、仕える者たちは戦々恐々たる有り様で乱行は日々に異常さを増していった。被害届が出せない犬猫や兎、鶏なども相当居たらしい。

陽成天皇の父親が源氏の祖とされる清和天皇である。藤原氏の策略で先帝の意向に反し優れた兄を越え、これも九歳で即位させられたため良い政治など行える筈が無い。陽成天皇の母親が飛んでる女性として皇族出の歌人・在原業平との浮名を流した藤原高子である。その息子であるから陽成天皇も宙に浮いているのかと思っただが「筑波根の嶺より落つる男女の川恋ぞつもりて淵となりぬる」と詠んで茨城県を宣伝してくれたのは此の人らしい。歌に見る限りはマトモであるが：

この歌が詠まれた経緯として伝えられるところでは陽成天皇が道ならぬ恋をした女性に贈った歌だとされる。相手は孝光天皇の第一皇女で「釣り殿の御子」と呼ばれた絶世の美女だという。かなり年上の、筋目で叔母になる女性だそうで叶わぬ恋ではあったが、筑波山のご利益で最後には恋が叶ったと記録されている――途な恋を成就させた純情な青年が、乱行で退位させられ座敷牢に入れ

られた――退位説の裏に何かあるのかも知れない。これで権力が藤原氏に集中するようになった。

現代の政治家などは自分の無能ぶりが分からず周りから「辞めろ！」と言われても平気でいるが、陽成天皇は「私はおかしいから辞めます！」と宣言をして、さっさと退位してしまつた。立派な天皇である。当時の摂政は「飛んでる皇妃」の兄・藤原基経（北家）である。実務上は困らないが天皇不在では権威の拠り所が無いので代りの人選を始める大勢の皇族たちが売り込みを始めた。

そうした中で、常陸国の長官など要職を歴任しながら皇族の素振りも見せず、粗末な服装で然も毅然として暮らしていたのが時康親王と言う五十五歳の男性である。父親は清和天皇の祖父に当たる仁明天皇で、母親は基経の従兄弟の娘であるから末流ながら藤原系である。基経は売り込みの激しい皇族たちの反対を押し切って時康親王を第五十八代の皇位に据えた。光孝天皇である。

思いがけない椅子が得られた光孝天皇は、藤原基経に感謝し、先を見据えて自分の子供たちを臣籍に降し「源」の姓を与えた。陽成天皇にも子供が居り、その中に基経の娘が生んだ男子があつたので自分の後の皇位が其の子に渡るように配慮をしたとされる。しかし基経は陽成系を否定した。

在位僅か三年で病いに侵された光孝天皇に対し基経は、臣籍に降つていた第七皇子の「源定省（みなもととのさだみ）」を皇位に就けるように進言をしたという。これは光孝天皇が密かに望んでいたことであつたから喜び、安心して冥途の旅に出発をした。藤原基経は天皇の恩人になつたのである。

仁和三年（八八七）十一月、源定省は宇多天皇として即位した。時に二十一歳、藤原基経が周囲

の猛烈な反対を押し切って担ぎ出した天皇であり通常ならば操り人形になるところであるが、この天皇は違つていた。後に菅原道真らを登用して国史編纂を進めるなど独自の政策を打ち出した。天皇の親政を目指したのである。当然、摂政の権威をかざした基経とは相容れず、即位に反対した連中の妨害にも遭つて苦労はしたが、自分の道を貫いたようである。何しろ、一旦は臣下に降つた身であるから、その当時の上役だつた皇族や公家たちは露骨に反発したのであろう。

宇多天皇の母親は、班子（はんし）女王と言う。桓武天皇の孫に当たる女性である。皇統が平城、嵯峨、淳和から文徳、清和系に移つてゆく中で女王とは名ばかり傍流の時康親王に嫁した。宇多天皇は、その母親の気持ち顧みるとき、桓武天皇系の皇族で未だに冷遇されている母の従兄弟たちを思い出した。自分は偶然に天皇となつたが、祖父・仲野親王の兄で桓武天皇に最も信頼されたと言われる葛原親王の系列が無位無官に置かれている。

宇多天皇は、藤原氏が権力を強めつつある中で、桓武天皇時代の強力な王権を回復したいと思ひ、能力がありながら不遇な日々を送っている高望王を救う決心をしたのである。任地として葛原親王や仲野親王が国守を務めた常陸国が選ばれた。

ここで歴史上の嘘とまでも言えないが、ある重大な錯覚に触れなければならぬ。石岡に所縁のある桓武平氏の祖先が赤旗の使用を許されて皇族から臣下に降つた：その時期は「桓武平氏」であるから桓武天皇の時代である：と思ひ込んでいるが、実はそれを實現させたのは宇多天皇である。

葛原親王は常陸国守などを務めたが、無官で置かれる子供たちの行く末を案じて淳和天皇の天長

二年(八二五)に「どうか私の子らを臣下に降し、平の姓を与えて下さい」と要望した。しかし葛原親王の子は男児だけでも十何人か居たので却下された。数か月後に「子らを整理したので」と最度の要望をして許された。まさか序列の低い者を処分した訳では無いと思うが「元皇族」とする者を絞って要望したのである。この時に「平」の姓だけ与えられて都に留まり、藤原一族並みに扱われることになったのが、先に触れた長男・高棟王である。そして「その他大勢」では無いが、絞り込まれたメンバーのトップに居たのが次男の高見王であり、名簿に載ったままで消えた。

父親が無位無官に終わったくらいであるから、夢も希望もなく、皇族の端くれという何の役にも立たない身分に置かれていた高望王に大きな転機が訪れたのは何歳の時であろうか：宇多天皇の寛平元年(八八九)五月十三日に思いがけず常陸大掾、上総介に任命されたのである。

官位は「従五位上」を与えられた。これは特別扱いであり、桓武天皇の曾孫に対するプレミアものである。通常は上総介が正六位上、常陸大掾は正七位下しか貰えない。その時代は天皇の権威を笠に腐敗した政治を進める藤原政権への不満から東北地方で反乱が相次ぎ、それが東国にも及んでいたから皇族の籍を離れた高望王は治安維持の為に赤旗の使用が許され、「平」の姓を貰って常陸国へ遣わされた。全ては宇多天皇の好意であるのに、その子孫が争乱を起こすことになる：馬鹿ども！(と桓武天皇が嘆いていたと思う)

都から見れば当時の辺境ではあるが、非常に豊かな常陸、上総、上野の三か国は淳和天皇の天長三年(八二六)に国守を親王とするように決めら

れていた。しかし運が良ければ天皇になれる親王であるから遠方へは来ない。都にいて給料を貰うのが仕事である。副知事に相当する「介(すけ)」が事実上の「守(かみ)」として任地に来る。中には横着な奴が居て「介」に任命されても現地に来ないことがある。そうすると官位が低いナンバー3の「大掾」が国守の権限を行使することになる。

都暮らしの下級官僚が地方の国司などを命じられた場合は任期満了まで辛抱して、帰りには土産や餞別を集めるだけ集めて都へ帰る。これが定番なのである。親王は別だが、国司や介に任命される者は、同じ国家公務員でも「受領(ずりよう)階層」と呼ばれ軽視されていた。そこで彼らは豊かな国に赴任して財産を増やし、有力者に賄賂を贈って出世の糸口をつかむ：平家物語「殿上の闇討の事」に登場する平忠盛の例である。

平家又は平氏と言えば桓武平氏しか知られていないが、ほかに仁明、文徳、光孝の各天皇(嵯峨系)が自分の子供を臣下に降し「平」の姓を与えていて「平氏四流」と呼ばれる。その中で桓武平氏の、それも常陸国を捨て父親の墓を捨てて都に出た平貞盛の子孫が、平清盛の出世に依って有名になり平氏の代名詞になった。平将門事件は、そのきっかけとなり日本の歴史を大きく変えた。

皇族から降って平高望となり、ついでに東国に下された高望王は長旅で腹をくだすことも無く先ず上総国(千葉県中部・国府は市原市)に到着した。本来は上総に留まるべきであるが多分、上司に当たる権守(ごんのかみ)が任命されていたのである。実務は上総大掾に任せておけばよい。

歓迎の宴会も終わり土産物が届いた後、平高望は利根川を渡って常陸国府へ来た。昨日までは皇

族の端くれとして、藤原一族の顔色を窺いながら暮らしてきた平高望は、常陸国府の木っ葉役人からちやほやされているうちに田舎暮らしが気に入った。権力に物を言わせて各地を開墾し私有地を増やし、此の地で子供たちを育てた。

一般に大掾氏が国府の職務を独占し、それを「姓」として常陸国府に君臨していたように言われているが、最初からそれだけの力があつた訳ではない。常陸国は大国であるから大掾職の定員は複数であり任免は中央が決めるけれども、中央に比較すれば「陰陽師」程度の下級職で碌な記録も残っていないらしい。高望王こと平高望が仁和三年(八八九)から、いつ頃まで大掾職に在ったか不明であるが、朱雀天皇の承平元年(九三一)には息子の平良望こと国香が常陸大掾に任命されているようである。

そして平国香の前任者が「源護(みなもとのまもる)」なのである。既に述べたように、平将門を襲撃して命を落とした息子たちの仇を討とうとして平良正をけしかけたり、将門らを告訴した人物で碌な奴ではない。平将門事件の火付け役のような存在であるが多分、常陸国に赴任してきた際に平高望に何かと面倒をみて貰ったのであろう。

それでなくても桓武天皇は嵯峨天皇の父であり、皇統を天武系から天智系に戻した偉大な始祖であるから、源護は尊敬の念を持って平高望に接し、その一族と密接な関係を築いていったのである。やがて自分の後任として高望の長男・国香が常陸大掾に任命された：好都合である。

常陸国府に勤務していた源護は、初めこそ都へ帰りたいと願っていたのだが、天皇の交代が頻繁になると自分の将来が不安になってきた。何しろ

自分と同じように一字名前だけを貰って皇族の籍から抜かれた者だけでも数え切れない程いる。頻りに交代する天皇の子弟を加えたら膨大な数になる。次の役職にあり付ける保証は無いのである。退職した後も、此の土地に居て「前大掾様」と尊敬されていたほうが人生としては楽しい。源護は、不動産屋から勧められた筑波山西方の平野部に館を築いて常陸国に永住することにした。

平将門が生まれた年は、菅原道真が藤原氏への恨みを呑んで死んだ延喜三年（九〇三）と言われているから、平高望が常陸国に赴任してきた時期には、同行してきた高望の息子たち（国香ら兄弟）は青少年であったことが推測される。

其の時代は度重なる政府の土地政策の失敗により、開墾した土地は私有地とされたため権力者、寺社、大富豪などが次々と土地を開拓しては私有地を増やしていた頃である。赤城説によれば、平高望が国香ら子供たちに分け与えた領地は概ね次のようなものであったという。

- ①平国香は、つくば市下石田に館を置いて、下妻市、桜川市、筑西市に接する一帯
- ②平良兼は、上総介の職に関連して千葉県の山武郡に本領があり、常陸国では筑波山北麓の羽鳥に館を置いて、その一帯
- ③平良正は、国道一二五号線と四〇八号線が繋がる辺りの水守に館を置き、その一帯
- ④平良文（この人は、争乱に介入せず、将門の遺児を預かったとされる。源頼朝に従った千葉氏の祖でもある）良将の領地に囲まれるように、筑波サーキットの北方に館を置き、その付近一帯を領していたが、此の人はやがて武蔵国の高官になったようで、武蔵国に本領

があったのであろう。

- ⑤さらに平将門の父親・良将は結城市、坂東市、常総市から守谷市に亘る鬼怒川西岸一帯と旧・大和村を中心とした桜川市南部にも領地があった。

また、源護は下妻市の大宝八幡近く、小貝川ふれあい公園西方の台地に館を置いて鬼怒川と小貝川の間位置する下妻市地区を領地としていた。それらの領地を分布図にした場合、嫡子である国香の領地が一番狭いように見えるが、面積よりも領地のある地形が重要なのである。筑波山の西側平野には桜川、小貝川、糸繰川、鬼怒川が南北に貫流している。河川管理が及ばなかった平安時代に増水で川筋が変わるから、筑波山麓に近く氾濫の被害が無くて河川の水が利用出来る場所が良い場所になる。国香が貰った場所が最高の条件に合致しそうである。源護の領地は、同じ条件で反対側の下妻台地に在った。

国香の弟たち良兼、良正、良将の領地も筑波山麓に在るのだが、将門の父親である平良将だけが筑波山麓以外に鬼怒川西方の広大な領地を持っていたのは、良将が下総守であった時代に開発したものであろう。名称のように「鬼が怒る川」であるから水害は頻繁に起きるが、別名が「絹川」で養蚕用の桑を植えて置けば自然に育つ。結城紬など絹が名産になる地域で、努力すれば報われる。

下総国府の所在地は千葉県市川市だが、初期には旧・茨城県結城郡石下町（常総市）大字国生（こくしゅう）に置かれていた。「こくしゅう」は「国庁」の訛りだと言われる。現在も鬼怒川の堤防近くに碑が残されているが、平将門は其処（下総守官舎）で生まれた。父親の良将が下総国で勢力を

広げることが出来たのは長官の威光もあるが、妻（将門の母親）の実家である下総国の名族・犬養氏の支援があったからと推測されている。

皇族から平氏に降った高望王の子供たちの中で国守となったのは、将門の父親と陸奥守に任命された良文の二人である。常陸平氏一族の長である国香は、常陸大掾で終わったが「鎮守府將軍」に任命されている。良兼は上総介から下総介になり陸奥国の大掾を兼ねた。そして史料に依っては諸説あるらしいが、将門の父親・良将は下総守から国香と同じく鎮守府將軍になり官位も国香を越えていたらしい。優れた人材で父親の高望王も自慢の息子であったと伝えられる。

その良将が若くして世を去り、残された子は後継ぎの将門が未だ十四、五歳、古代の家父長制からすれば、長老の国香伯父さんがシャシャリ出て来ることになる。赤城説では国香の指示で良兼伯父さんが、職務上も下総介を兼ねて公私ともに将門一家に被さってきたようである。兄弟の中で父親に眼をかけて貰っていた弟が死んで、兄たちがその家族を後見することになった。

元服が済んだ将門は、伯父たちの指示で当時の地方豪族の子弟が進む道に従い、都へ上り藤原一族の有力者を頼って書生として住み込んだ。勿論、相応の謝礼が支払われたことであろう。既に国香の長男（将門の従兄弟）貞盛は藤原氏の口利きで公務員に採用され、国土交通省に勤務して運輸担当の係長程度に出世していた。

将門も、やがて推薦により御所の警固に任じる「瀧口の衛士（たきぐちのえじ）」の職を得た。この仕事は嵯峨天皇の時代から置かれた「蔵人所（くらうどところ）」に属する警固役で夜間の御所警備

が主だが、武芸に優れた者が試験で選ばれた。身分は低く暇な時には庭の草取りなども仕事に含まれていたけれども、常に天皇の身近を護る職であり時には天皇の行状が知れる立場である。

当時の天皇は天皇親政を目指したが歌舞管弦が好きな醍醐天皇であり、桓武平氏を見出してくれた父親の宇多天皇（上皇）も健在であった。仕事とはいえ、天皇や公家どもの前で蛙のように這いつくばっている自分の姿を思うとき、天皇即位のこともあり、桓武天皇の子孫として平氏を名乗りながら、藤原氏に屈している将門が皇位についての憧れや偏見を持ったとしても不自然では無い。

そうした都暮らしを十年ほどして、奇しくも菅原道真公の崇りで人々が戦々恐々としていた延長八年（九三〇）頃に、平将門は下総国へ戻ってきたようである。帰郷の理由は、あれこれ言われており、伯父たちに頼んでおいた広大な所領や母親など家族のことが心配になったとするのが一般的ではあるが、それは幾つかの中の一つであり、最大の理由として挙げなければならないのが「権威に対する将門の怒りと失望」であったろう。

赤城説でも触れているが当時の都、つまり天皇の核の傘に入った藤原一族を中心とする上流貴族社会は庶民の苦勞を余所に腐敗墮落しており、特に男女関係の乱れが目に見える状態であったと言われる。代表的な例が「今昔物語集」に採録されている「平定文（系統不詳）」の女性問題失敗談とか「源氏物語」の人間関係とか先に述べた皇后（藤原高子）の恋愛遍歴などに表わされている。

そうした中で地方の国府でも役人の綱紀が乱れていて、日向の国では国司が書類を偽造したり、讃岐の国では国司が魚を獲る為に農業用水の池を

壊したりする事件を起こしている。加えて各地に盗賊がはびこり将門が戻って来た頃には京都の街中に盗賊団が溢れている状態であった。藤原政権は天皇の権威にしがみついている己らの繁栄と享樂のためにのみ政治を行っていた。国民のためには何もしていないからなのである。

そのような都に嫌気が差し、筑波山麓に開けた大地に希望を求めて帰郷した将門を待っていたのが領地問題である。将門が相続した広大な領地は伯父たちが管理していた。国香は長老であるから、実際のことは良兼が見ていたであろう。預けられた弟の領地を目にする度に良兼は思った。弟は国の長官で居たのに、兄である自分は同じ国の次官にしかたなれなかった。円満に済む話ではないところに弟の遺児が相続する領土が広いだけで無く、時代が変わり絹の価値が上がって、今や鬼怒川沿岸の絹の産地は「宝の山」になっていた。甥の将門は、今まで都に居て何の苦勞もしていないのにそれを相続する。後見人として面倒を見てきた俺の立場はどうなるのだ。良兼の不満はつもの。

その様な時に伯父・良兼と将門との間に、ある問題が起こった。承平・天慶の乱を記録した「将門記」の冒頭には「伯父・平良兼が」…去る延長九年を以て、聊（いささ）か女論に依りて、舅甥（おじおい）の中既に相違ふ」と書かれている。「舅」の字は、大漢和辞典で「おじ—母方のおじ」とも読ませているが、普通に読むと「しゅうと・おい」である。その辺りのことと、大国玉地方の豪族で将門の同志でもあった平真樹の娘で将門の後でもあった「君の前」の存在とを重ね合わせて「女論」の内容は、概ね次のような関係と推定されている。

①将門の正室「君の前」には源護の息子・三人のうち誰かが（或いは三人とも）懸想していたのだが、君の前は、それを振って将門に嫁した。

②源護には何人かの娘が居り、既に平氏の良兼、良正は護の娘を妻にしていた。国香も貞盛も縁戚にあつたとする説もある。常陸に定着した桓武平氏と嵯峨源氏（と推定される護一族）は、縁組を通じて共同体的な連携を深めていた。

③父親の死後、当時の地方豪族の子弟が踏む道筋に従って藤原氏を頼り、閑白の家臣として勤務していた将門が帰郷した。伯父の国香らは一人身の将門に「源護の娘を妻にするよう」勧めた。この縁談が整えば源平両氏の絆を深くすることが出来る。多分、その思惑には、将門が相続した広大な領地のこと絡んでいたと考えられる。将門は、その縁談を蹴り、源護の子らが懸想していた娘を后に選んだ。国香、護らの面子（めんつ）が潰れた。

④同じ頃、平良兼の娘が、立派な青年となって帰郷した従兄弟の将門に好意を抱き、多分、家出をして将門の許に走った。当時は一夫多妻が普通であるから、この娘は将門の第二夫人として下総国の将門館に暮らしていた。

⑤平良兼は妻の実家である源護の手前、そして将門の後見人代理と言う立場から放つても置けず将門の許から娘を連れ戻したのだが娘は隙を見て再び将門の許に戻ってしまった。そうなる源平両家の間で良兼の立場が厳しくなるため、良兼は将門と仲違いになった。

…これらのことは、相互に不満と多少の怨念は残したが、飽く迄も私的なことであるから「絶交」程度で済んでいたのだから、辛うじて

維持していた両者の関係をブチ破ったのは「恋の恨みとプライドを傷つけられた！」源護一族なのである。それ程の面子でもプライドでも無かったが、一般に何処の馬の骨か分からない奴ほど家ガラとか鳥ガラとか、くだらないことに拘るもので「嵯峨（又は仁明）源氏」を無視され、自分たちが袖にされたことを恨みに思った源護一家が画策し国香ら桓武平氏を巻き込む形で争乱の導火線に火をつけた。にも拘らず、どの史書にも争乱の発端は桓武平氏一族の内輪もめに帰っていて「源護」の深い関わりを指摘していない。氏素性が明らかでない源氏が無視されていた、とも言えるが：

既に述べたように、自分たちが挑発した合戦に敗れて命を失った息子三人の仇を討とうと、源護が将門らを告発した裁判では、裁判員制度は未だ無かったが将門の印象が良くて半年ほど都に留まっただけで無罪の判決を貰った。その頃に高望王の従兄弟の子で、桓武平氏高棟流を継ぐ平伊望、時望という兄弟が大納言と中納言になっていたし将門が仕えていた藤原忠平が太政大臣に就任していたこともあって、源護の告訴も全体的には将門有利で裁判が進んだのであろう。

将門は意気揚々として承平七年（九三七）の夏には下総国へ戻ってきた。これで喧嘩騒ぎのほうは終わったことになるのだが、歴史の神様は、公家の時代を変えて平家の子孫に始まり凡そ七百年間続く「武士の時代」を造りあげるために「多くの遺産を持つていた平将門が次々に狙われる」という単純な筋書きを拵えた。その主役として「権力に抵抗する英雄・平将門」が世に送り出され、腐り切った藤原政権に揺さ振りをかけたのである。

将門らが無罪の判決を土産にして都から戻り長

旅の疲れを癒している間も無く、泥沼の如き戦乱の火の手は伯父であり、妻（側室）の父親である平良兼によつて挙げられた。承平七年（九三七）八月六日のことである。将門記は伝える。

「未だ旅の脚を休めず、未だ旬月を歴（へ）ざるに、件（くだん）の良兼、本意の怨みを忘れず、尚（なお）し会稽の心を遂げむと欲（おも）ふ。頃年構へたる所の兵革、其の勢ひ常よりも殊（こと）なり。便（すなわ）ち八月六日を以て、常陸・下総両国の堺、子飼の渡に囲み来る。其の日の儀式は、霊像を請ひて陣の前に張れり。霊像と言ふは并（な）り止（と）ぬ陸（りく）軍（ぐん）形（かたち）なり。精兵を整えて将門を襲ひ攻む。其の日、明神は忿（い）かりありて慥（たし）かに事を行ふを非とす。随兵少なきが上、用意皆下りて、只、楯を負ひて還る（前段）」

意識すると「将門らを追い詰めようとして起こした裁判で不本意な結果が出た原告側は、これを恨みに思い、何とかして恥をそそぎ仕返しをした」と準備をしていた。その中心人物は将門の伯父で下総の職にある平良兼である。将門が京都から戻って未だ一か月も経っていない八月六日に軍勢を集めて常陸・下総の国境になる蚕飼（こかい）の渡し（旧・筑波郡大穂町吉沼と結城郡千代川村宗道に通じる県道五十六号線・愛国橋の辺り）東側は将門領地）を囲むように攻めて来た。

軍勢の先頭には、将門の氣勢をすぐ目的で高望王と将門の父親の似顔絵を掲げている。これでは攻める訳にいかない将門は、味方の兵士が少なかつたこともあって、戦さの神の御怒りを受けたように敗退してしまつた。――

この後は勢いに乗つた良兼らの軍勢が将門の本

拠地に攻め込んで豊田郡に置かれていた栗栖之院常羽の御厩（くりすのいん）いくはのみうまや）及び近隣農民の家々を完全に焼き払つた。現在でも地元に残る栗山観音や栗山部落も焼かれたのである。栗栖院常羽御厩は、先に述べた多治経明の管理する国宮の厩舎であつたらしい。この合戦と約十日後に行われた「堀越の渡し」の合戦で将門は連続して大敗を喫する。その時期の将門は持病の脚氣が悪化していたようである。そして葦津江の岸辺に避難させていた正室（君の前）が良兼によつて殺害され、良兼の娘であつたと思われる妻が奪い去られることになる。

家族を殺され或いは連れ去られた将門は、直ちに伯父の良兼と従兄弟の貞盛を告訴した。しかし、この訴えは裁判所まで届かなかつたらしい。郵便事業会社の不手際では無くて、良兼らの妨害に遭つたのであろう。その頃、先の合戦で勝利を収めた良兼は任地の下総国には行かず、筑波山麓・真壁寄りの領地・羽鳥の館に居た。その情報を耳にした将門は千八百余の軍勢を集め、良兼の館から羽鳥の集落一帯を急襲して焼き払つた。

この良兼と言う人物は国香の弟で、桓武平氏系図では将門の父親である良将の兄になつている。庶出説もあるようだが嫡男の国香と出来の良い三男・良将に挟まれた次男として難しい立場にあつたとしても「あまり利口ではなかつた」ように思えてならない。堀越の渡しの合戦などで卑劣な手段を用いて将門を負かした。しかし完勝した訳ではないから、いつ報復されるかも知れない。そのことに思い至らず、のんびりして襲われたから逃げるだけで精一杯、山裾から攻められたため逃げ込む場所は筑波山中しかない。

将門記には「：件（くだん）の敵、弓袋の山の南の谿（たに）より、遙かに千余人の声聞（こゆ）」とあり、羽鳥から一旦は山頂を目指し、そこから東に逃げて旧・八郷町から真壁町に通じる県道一五〇号線の湯袋峠西方谷間に潜んだのである。其の辺りは現在でも深い樹林と急勾配で入り込むのをためらわれるような地形である。追いついてみても動きが取れないから、将門軍は出てくるように敵を挑発したり、ざわめきの聞こえる方向に矢を放つたが無駄であった。

将門は報復のため峠を越えて小幡の郷を占領して荒らし回った。例の如く焼かれた家もあつたと推測されるが、此の里は古くから絹織の産業が盛んで暮らしも豊かなので、折から秋の収穫を待つ稲東が至る所にあり、家々には食糧も十分に蓄えられていた。占領軍は、ぬかるんだ道に馬や牛を通すため、稲束を持ち出して滑り止めをしたり、酒などを押収したり乱暴な行いをした。酒を飲み過ぎてうろろうろしているところを敵に狙われて七人が討ち死にをした。人間がその様な有り様なので牛も是を真似て喰い過ぎて十頭が死んだ。

当時は平良兼が支配していたのかどうか：「小幡の郷」は言うまでも無く石岡市（旧・八郷町）の小幡であるが、此処は古代から開けた豊かな集落のようで日本の歴史には度々登場する。正倉院には小幡から納められた絹が残ると言われ、将門の乱では荒らされ、約四八〇年後には室町幕府の鎌倉府を滅亡させるきっかけとなった上杉禅秀の乱の発火点にされた。どれも地元には何の責任も無く当時の権力者の罪である。

攻めては攻められ、そうなるに憎しみが憎しみを呼び一族間の争いは激しくなるばかりである。

寒い時期に湯袋峠に押し込まれた平良兼は、余程辛さが身に沁みたようで、今回も自分の行動を棚に挙げて将門を中央政府に告訴した。将門の方も敵の考えは読めるから対抗措置として弁護士に良兼らを訴える訴状を書かせた。その際に将門は「虎穴に入らずんば虎児を得ず」と言う諺を思い出して思い切った方法を執った。これは極めて危険な方法ではあるが効果はあつた。つまり、自分が告訴する相手は下総介という国府のナンバー2であるのに、ナンバー3の下総大掾宛てに訴状を出したのである。

訴状を見た下総大掾は、事件が拡大していることで上司の平良兼と前の常陸大掾らが訴えられていると知り、慌ててトップの下総守に報告した。当時の下総守が、平氏源氏とは無関係の人物であったことから、将門の訴えは良兼には内緒で太政官に送られた。一方、順序を経ていない良兼の訴えが優先され前回の裁判に続いて将門の勝訴となった。それどころか、合戦を仕掛けたのは平良兼らであると判断され承平七年十一月五日には「源平追討」の官符（命令書）が武蔵、安房、上総、常陸、下野の各国府に下されたのである。良兼らが国営の施設である栗栖之院常羽の御厩を焼いたことが重罪視されたものと推測される。

これで騒動の張本人である平良兼・源護らは退治され常陸、下総両国の里人を苦しめた「承平の乱」は終結する筈であった：否、終結しなければいけない：ところがここで日本の歴史に「大嘘」が堂々と罷り通る―理不尽が正当化される出来事が発生し「権力の或る者が勝つ」という日本の醜い伝統が維持されることになってしまった。

先ず中央政府からの命令書を受け取った国府側は、討伐する相手が下総介と前常陸大掾であると聞いて尻ごみを始めた。当時の国府には「檢非違使（けびいし）」又は「押領司（おうりょうし）」などと呼ばれる司法役人も居た。後に平将門を討つた藤原秀郷は、平貞盛に協力を依頼された際に下野国の押領司として合戦に加わっている。さらに軍隊とは言えない迄も、或る程度の軍事力を国府は保有していた。特に常陸国府は北方・蝦夷に備える防衛基地であり、相応の兵力も有していたのだが、どの国府も「触らぬ神（上）に祟り無し」と言う諺を思い出して、偉い人と争うことを止め、良兼らを討伐せよ、という朝廷の命令を無視した。

もう一つ不可解なことがある。それは承平七年十一月に発せられた「追討文の内容が逆であった」とする説が存在することである。つまり追討の対象になったのは「平良兼、源護ら」では無く、平将門であった：とするもので幸田露伴説、赤城宗徳説などはこれ採っている。違つた原因は次のような「将門記」原本の記述にある。

「**縣後**或國盛十一月五日介良兼源護
公雅公連秦清文凡常陸國等可追捕將門官符被下武蔵安房上総常陸下毛等之國也於是將門頗述氣附力而諸國之宰乍抱官符慥不張行好不堀求而介良兼尚銜忿怒之毒未停殺害之意向便伺隙終欲討將門」
これを平凡社刊の書き下し文で：

「**縣後**（その後）同年十一月五日を以て（下総）介・良兼、（常陸）大掾・源護、並びに少掾・平貞盛、公雅、公連、秦清文、凡そ常陸國の等々將門に追捕すべき官符を、武蔵、安房、上総、常陸、下毛野等の國に下されぬ。是に於いて、將門は頗る（すこぶる）非常に）氣を述べて力を附く。而

るを、諸国の宰（つかさ）国司など、官符を抱きながら慥か（たしか）に張り行わず（実行しない）好みて掘り求めず。而るに下総介・良兼、尚も忿怒之毒を銜んで（ふんぬのどくをふふんで）激しい恨み心をもって、未だ（将門を）殺害の意を停めず。便りを求め隙を伺いて、遂に将門を討たむと欲（おも）う：」と読んでいる。

それは■の部分に別版の将門記から「敵」という文字を補填したかららしい。素人が口出しする分野では無いが、もし仮に■の部分に他の文字が入って、違った読み方をすれば「…良兼らに将門追捕の官符が下った」と読むのかも知れない。そうなると「朝令暮改」と言う現代の政治でも行われている方法で政策がコロコロと変わり「昨日の正義は今日の悪」として扱われた平将門が怒り狂って巨大な権力に立ち向かうことも、起こるべくして起こったことになる。やがて、常陸国府の内部に発生した無能な国司への抵抗運動が絡んで国府を出た常陸小掾（大掾の下級職 藤原玄明（ふじわらのはるあき）真壁地方の豪族）を庇護したことから、将門は妻の仇敵でもある貞盛が隠れていたこともあって常陸国府を襲撃し「反逆の徒」と呼ばれる道を通るようになるのである。

また将門記に忠実に「諸国の宰（つかさ）国司など、官符を抱きながら慥か（たしか）に張り行わず（実行しない）」平良兼らが政府から悪人として指定され、追討命令が諸国に出されたにも関わらず、どこの国（県）の役人も協力しない！となれば、自棄を起こした将門が諸国の国司などを敵として暴れ回るような事態も起こり得る。

どちらが事実なのであろうか…と言うよりも、この章の冒頭で述べたようにその時代の日本の国

家機構は、朝廷・貴族を守るための全く形だけのものであり無政府状態に近かったのである。そこで「将門記」を書いた人物（諸説あり、戦記編集論もあるようだ）は、世の中がどの様に変わってゆくか、全く予想が出来ないことを考慮して、後世に世情に合わせた解釈が出来るよう敢えてイソップ物語「鳥獣戦争の蝙蝠（こうもり）」のような表現をしたのである。これは「嘘」では無く、歴史の本質を捉えた優れた技巧かも知れない。

それよりも、平将門の乱こと承平・天慶の乱はこれまで言われてきたような単純な領地争いや、女性がらみの対立が発端と言うのは、当時の政府が自分たちの無能ぶりを隠す為に言わせた「天嘘」である。また桓武平氏一族だけが起こした騒動でもなく、争いの元は「嵯峨（仁明）源氏らしい前・常陸大掾の源氏一家」にあった。

結局、不遇だった桓武平氏に対して、宇多天皇が「平の姓を許し赤旗を与えて子孫、武を以て奉公せよ」と高位高官を授けてくれたことが子孫の愚行によって仇になったのである。日本の国の為になったかどうかは別にして、この一族が赤旗を翻して歴史上で活躍するのは六代も後になる。

赤旗の平氏に対して、白旗の源氏はどうかと言うと、何とも不思議な因縁から平将門事件の真犯人である常陸国の執念深い源氏を含めて数ある源氏の中から白旗組に抜擢されたのが清和源氏である。既に陽成天皇の話で紹介したような事情からこの系統は清和天皇の子・貞純（さだずみ）親王を祖先としているが、それが「嘘」だとすると陽成天皇の第二皇子・元平親王が祖先になる…

他人にはどうでも良いことなので、此処は騙されて…清和天皇の六番目の子が貞純親王であり、

其の子を経基（つねもと）王と言った。清和天皇の六番目の子に生まれた孫であると言うくだらない理由から経基は「六孫王」と呼ばれてチャホヤされており、醍醐天皇の延喜七年（九〇七）に十五歳で元服した際に「源」の姓を貰い皇族の籍を離れた。その時に「正六位」と言う国司並みの官位を与えられ、白旗を授けられて武門の家を興したのである。桓武平氏のスタートに比べて破格の待遇であるが、その頃には、或いは経基の実の祖父かも知れない陽成天皇が未だ上皇として在籍していたから粗末には出来なかったであろう。

その源経基が、平将門事件のうち、後半の天慶の乱に深く関わる。石岡が将門に攻められる半年ほど前のことである。将門記にあるように関係する国々には「将門に協力して、良兼らを討て！」或いは「逆賊・将門を討討しる！」と言うどちらかの命令が伝えられ、どちらにしても国庁では全く動くことが無かった頃に、国家権力も平氏一族も信用出来なくなった将門と、源平両家の為に負けられない連合組織とは食うか食われるかの戦いを繰り広げており、将門が有利に立っていた。

天慶二年（九三九）、源経基は武蔵介として府中市に在った国府に到着した。同時に権守として興世王（おきよおう）も赴任してきた。それ迄の国司は藤原維幾（これちか）であり、常陸介に転じて石岡に来た。維幾の妻は平国香の妹であるが、この段階では常陸国府が攻められるとは誰も考えていなかった。武蔵国は未開地も多く東海道の終点である常陸国府の方が開けていたのであろう。維幾はサッサと新任地へ移ってしまい、留守は足立郡司の武蔵武芝と言う人物が預かっていた。

武芝は古代の武蔵国造（くのみやつこ）の後

裔と言われ、気骨の有る人物だったようで、新しくやって来た上司の辞令が未着であると公務を遠慮するように申し入れた。正当な言い分であるが興世王（素状不明）も源経基も、元皇族として自惚れた性格が抜けきらない。乱れた世であるから皇族も盗賊も変わりはないのだが；強引に権力を行使しようとする着任者と、正規な手続きで迎えようとする国府側とで争いが起きて、それを聞いた将門が調停に乗り出したのである。

この調停が上手くいったのか、失敗だったのか何とも言いようのない結末なのだが、三者が別々な場所に供の人数を連れて集まっていた。まず、武蔵武芝と興世王の話が決着し、次に源経基と武芝の調停が行われる際に武芝が経基の許を訪れることになった。武芝は地元の豪族であるから郎党たちも多い。その人数がゾロゾロと行ったのを見た経基は、自分が攻め込まれたと勘違いをして大慌てで武蔵国を逃げ出し、都に戻って「平将門が謀反を起こして武蔵国を占拠した」と訴えた。

都の役人たちは「平将門」と言う名前には敏感になっていたから、たちまち大騒ぎとなり気の早い者は洛外の親戚を頼って疎開する準備をした。かつて将門が仕えていた藤原忠平が調べさせると武蔵国にトラブルは有ったが、将門が暴れた事実はない。将門は関東五カ国の役所から貰った証明書を送り自分の無実を明かしたようである。政府は「嘘」の情報で訴え出た源経基を軽い禁固刑に処し、状況を把握させるために何人かの役人を武蔵国に派遣しようとした。ところが、平将門が絡んでいると聞いた役人は病気と偽って逃げている。正に政府の機関が崩壊していたのである。そういう状況を知り、また自分が居た頃の都の

墮落を思い出した将門が、誇大妄想的な国家建設の夢を抱いたとしても不自然では無い。その頃の将門は、平良兼が死んだ後に平氏の頭領となり、自動的に敵側の総大将となった従兄弟の平貞盛の行方を追っていた。その貞盛が常陸国府に匿われているとの情報が入った。先に述べた常陸少掾・藤原玄明の問題もあって、天慶二年（九三九）十月に千人の兵で三千人が守る常陸国府を包囲した将門は、貞盛の引き渡しと藤原玄明の処分撤回を常陸国司・藤原維幾に要求して拒絶された。「宣戦布告」により合戦の手段として町に火が放たれ、折からの風に燃え上がる炎と共に平将門は「逆賊」としての地獄の道を歩むことになった。

「平将門謀反」の知らせを受け取った朝廷は、今迄のことで懲りているので、先ず会議を開いて慎重に対策を検討し、將軍を決めて追討させることにした。八カ月前に「将門謀反」の情報を知らせながら「早過ぎる！」と怒られて禁固されていた源経基は許されて将門征伐に出陣を命じられ、やっと白旗を掲げることが出来ることを心から喜んだ。これが後に源平合戦を繰り広げることになる「清和源氏」のデビューである。しかし、将門追討の將軍は五か月前もかかって藤原一族の者が任命され、あれこれと儀式を行ってから出発したので現地に着いた時には全てが終わっていた。

平将門を討つたのは平貞盛と藤原秀郷の連合軍とされている。勢力を強めた将門に迫られていた貞盛が秀郷に協力を求めたのであろう。その前に秀郷は将門とも面会して一緒に昼食を摂った話もあるから、どちらに味方しても良かったので情報を分析した結果で将門の兵力が少ない時期を選んで攻め込んだ。当時は武士団も不景気で常備軍で

は無く派遣社員が多かったらしい。

藤原秀郷には三井寺信仰に関わる「大百足退治」の伝説がある。武人は少し有名になると怪しい伝説が作られるけれども勿論「嘘」である。ただ同じ嘘でも荒唐無稽の嘘は面白い。一番困るのは馬鹿正直な嘘で、日本の歴史にはその類（たぐ）いの嘘が多い―それは兎も角、藤原秀郷も何か乱暴を仕出かして「罪人」にされていた。それが許されたのか、自分で許したのか、平将門を討ち滅ぼした功績で一躍して英雄になってしまった。実際には平将門の死は「流れ矢」によるものとされているから、その時に矢が逸れていれば将門が反撃に出て勝ったかも知れない。

藤原秀郷の祖先は藤原北家の「魚名」だと言われる。常陸国司を務めた藤原宇合の兄が北家を興じた藤原房前であり、その後を継いだ真楯の系統には清和天皇を強引に擁立した良房、菅原道真を蹴落とした忠平、花山天皇を騙して退位させた兼家、傲慢不遜な道長など凶々しい人物が多くて、藤原一族が日本にはびこることになった。

ところが真楯の弟の魚名は左大臣にまでなりながら、ある事件にからんで失脚したため、その子孫は「藤原」とは言っても「むぎわら」程度にしなかつた。桓武平氏と同じ様に下野国大掾職を命じられて栃木市近辺に土着したのが秀郷の家系である。藤原魚名が失脚した「ある事件」と言うのが、平氏の大祖・桓武天皇に大きな関わりのあることなので「魚名の子孫の藤原秀郷が桓武平氏の争いを終息させた」ことには、何となく因縁めいたものを感じてならない。

承平・天慶の乱が終息した西暦九四〇年から約一六〇年ほど前に「氷上川継（ひかみかわつぐ）

の変」が起きている。どういう事件かと言うと、クーデターにより桓武天皇を暗殺して、氷上川継が皇位に即くという、聞けば大事ではあるが未遂に終わったので歴史上では余り知られていない。

氷上川継と言う天然製氷のような名前の人物は、天武天皇の曾孫に当る。父親は塩焼王と言って、これまた献立の様な名前であるが配偶者は聖武天皇皇女・不破内親王である。二人の間に生まれたのが川継であるから、天皇になれる可能性が無かった訳ではない。塩焼の兄か弟である道祖（ふなご）王は、孝謙女帝の皇太子に立てられた。また、母親・不破内親王の姉は光仁天皇の皇后（井上内親王）である。しかし、どちらも藤原一族の血筋では無いので陰謀により消されている。川継も、何処かに飛ばされていたと思うのだが光仁天皇の即位による恩赦で下級官僚に復帰して地方の国司に任命されていた。

光仁天皇は、聖武天皇系の人材が絶えた後に弓削道鏡政権を倒した藤原宇合の子・百川や従兄弟の永手らが担ぎ出した天皇であり、民間ならば定年と言う年齢で即位した。この天皇は天智天皇の子の施基（志貴）皇子の子であり、母親は名族・紀氏の娘であるから藤原氏とは関係が無いのだが百川や永手らが権力を伸ばすために選んだ人材であり、皇位を狙う野心家が多い中を地味に地味に時には逃亡生活並みに地下に潜って生き延びた。即位と共に、奥さんの井上内親王を皇后にして二人の間に生まれた他戸（おさど）親王を皇太子とした。皇太子は十六歳になっていた。

光仁天皇が即位したのは六十二歳のときであるから、当時としては先が短い。其の俣では聖武天皇系の他戸親王が次の天皇になる。藤原一族には

損にも得にもならないのだが彼らには遠大な野心があった。長く続いていた天武天皇系の皇統を、始祖・藤原鎌足が共に苦勞をして打ち立てた天智天皇系に戻すことである。そして自分たちが担ぎ出した天皇の元に権力を握る…。

光仁天皇が即位してから三年目の宝龜三年（七二二）春のこと、突如として井上皇后と他戸皇太子が、天皇とその姉を呪（のろ）ったと言う証拠の無い罪で逮捕監禁され、殺された。当時は実に便利な方法があったもので、権力者が「消したい」と思った人物は、誰かが「〇〇さんが呪詛しています！」と密告すれば、それで良かった。

居なくなつた皇太子の代わりに、重臣たちが自分に都合の良い皇族を探してきて推薦を始めた。其の中で藤原永手と藤原百川らのグループが探してきたのが三十七歳の山部親王である。天皇となる条件の一つに母親の血筋があつた。山部親王には日本以外の血が入っていた―つまり母系が百濟（くだら）人であつた。くだらないと言つてしまえば済むのだが、当時はそうもいかなかったよう、反対者が圧倒的に多い中で、百川らが恐喝まがいに強引な方法で山部親王を皇太子にした。それが後の桓武天皇である。

この人事に依つて、壬申の乱で奪われた皇位が天武天皇系から本来の天智天皇系に戻つたのであるが、聖武天皇の血筋を引く連中は面白くない。その急先鋒にいたのが「氷上川継」である。藤原百川らの強引なやり方に反発する同志を集めて、かなり適当で杜撰（ずさん）な方法ではあるが、クーデターを計画した。

桓武天皇が即位した翌年の延暦元年（七八二）正月早々に、宮殿内を見回りしていた役人が誰も

居ない筈の部屋から、誰かがひどく咳き込む音を耳にした。それも殿中の床下から、しきりに聞こえてくる。不審に思い同僚を呼び寄せてから灯りを点けて調べると怪しい男が寒さに震えながらうずくまっていた。直ちに取り押さえられて厳しい取り調べが行われた

始めは黙秘権を主張していた男も、風邪薬を貰つてからは、聞きもしない秘密までスラスラと自供をしてスッキリとした顔になった。男の名は大和乙人と言い「忍びの名人」と主張したけれども簡単に捕まってしまったので当てにはならない。寒さに風邪を引き咳が出たのが失敗で、次は薬を持って仕事に就くと言っていたが次は無かつた。大和乙人は、氷上川継に雇われており、その自白から途方も無い計画が発覚した。それによると、桓武天皇の即位に反対するグループが正月の十日深夜を以て一気に御所を急襲し天皇を暗殺する。反乱軍は先ず氷上川継を即位させ、急を聞いて駆けつける公家・重臣たちに新天皇の存在を知らしめて服従させる計画であつた。その為、忍び者の大和乙人は、当日に、こっそりと北門を開ける役目で床下に潜んでいたのである。

桓武天皇側では敵の作戦の裏をかき、供揃えも仰々しく「勅使」を派遣し、貴賓として氷上川継を迎え入れることにした。この出迎えの様子を見た川継は、さすがに陰謀が露見したことを悟り逃亡したが直ぐ捕らえられてしまった。本来なら簡単に斬られるところ、光仁天皇の喪中であつたことから罪を減じられ淡路に流された。川継の母・不破内親王も淡路へ行かされ、その他の関係者は厳しく処罰されたのだが、そのメンバーの中に何と内閣総理大臣に相当する左大臣の藤原魚名の名が

あった。主犯が氷上川継で、その父親が塩焼王で、協力者が魚名となると、この話は「嘘」に思われてしまうが、幾つもの史料に記録されているので本当のことである。

事件の根底には桓武天皇を擁立して権力を伸ばそうとする新進気鋭の永手や百川などと、出生に難点のある桓武天皇を避けて他の皇族から天皇を選ぼうとする野心家たちの葛藤があり、強引な手法を使った桓武派が勝利した。負けた藤原魚名は太宰府に左遷され翌年には寂しく現地で没した。菅原道真公が同じく太宰府で没する一二〇年前のことであるから、祟りを起こして関係者を苦しめる方法を知らず、歴史の表舞台から淋しく消えて子孫が最終的に下野国に行ったのである。その魚名の子孫である藤原秀郷が、桓武平氏一族の相続争いに端を発した「承平・天慶の乱」を平貞盛に協力して平定し、武人として名を挙げる。

天慶三年（九四〇）三月二十五日、平貞盛ら桓武平氏一族及び藤原秀郷ら下野藤氏一族は、多数の郎党を従え、平将門の首を風呂敷に包んで都に凱旋した。この軍功により、秀郷は従四位・下野守に任じられ、子孫が下野国に広がる。貞盛は休職中であった役所の地位が部課長級に上がり、従五位を授けられた。将門の首は京都七条河原に曝されていたのだが「関東のほうが良いであろう」と考えた同調者が武蔵国の海岸まで運び、埋めた場所が昔の神田神社である。

藤原秀郷は生まれが近江国とされ、その地名によつて田原藤太と呼ばれていた。地元で生じた百足退治の伝説により、神様から貰った「俵（たわら）」が好運を呼んだとして「俵藤太」とも言われるが、武士としては平将門を討った功績しか残ら

ない。息子の藤原千晴は相模介になったが冷泉天皇時代に起こった「安和の変（あんなのへん）」醍醐天皇の皇子・源高明が、皇位継承を巡る藤原兼家らの陰謀で失脚左遷させられた事件」に連座して秀郷流は消えた。無実であったから、これも平将門の怨念の所為と言えないこともない。

「毀誉褒貶（きよほうへん）」と言うが人間の評価は不変では無い。「平将門」の場合が、その最も甚だしいものであろう。とかく歴史は権力で変えさせられる。「嘘」で悪人にされた主人公は自分の主張を「祟り」で証明するしかないが、藤原魚名のように祟る方法を知らない泣き寝入りするだけである。歴史に興味を持つ者は、文字に記された事跡の裏に隠された真実らしきものを見つけ出す義務があるのかも知れない。

【風の談天室】

桜の花が終り、里山を眺めると藤の花が満開である。今、ゴールデンウィークまったただ中であるが、非常に寒い。考えてみると、暖かな陽気の良い春といつのはあまりなかったように思えるのだが。庭に植えたキュウリやトマトの苗の成長が遅いように思う。やはり暖かさが少ないように思う。

このまま進んで、今年の夏は冷夏になるのではないだろうか。もし冷夏になれば、電力供給には助かるであろうが、農作物には最悪の年になる。昨年も米の出来具合がよくなく、米の味が一味も一味も落ちていたが、今年はずっとこの味が沢米でこの福島では、作付も遅くないこの味が沢

山あるのだから、冷夏になるなどのんきな話が出来なくなるのである。

ことは座「常世の国の恋物語」第4話「風貫（ふき）」で、天保年間の冷害を背景として龍神山の龍の流した涙について物語にしたのであったが、長雨はないもの大変な飢饉がやって来るのではないだろうかと気がかかる。

当会報は今回が60号である。満五年となったわけである。毎月、誰一人欠けることなく原稿を書き続けることは大変である。それを思うと60号まで進められたという事はお祝いに値するだろう。鈴木健さんのご投稿も一年になる。有難うございませ。会報も部数は変わらないのであるが、配布先が随分広範囲となって来た。

先月の定例会で、平均年齢は高いが、高齢でなければ言えない事もあるので、精一杯大声で怒るべしと確認し合ったのであった。

《ふらの》

「パスタ・ブレンド蕎麦蕎麦会席料理の

お店です（ギター文化館通り）

看板娘（犬）「うらら」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-476-0000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」(第27話)

ことば座第20回公演「流海(うみ)の舞」

6月17日・18日・19日(午後3時開演)

第20回公演は、常世の国の恋物語百/第27話として、モダンダンスの柏木久美子さんを招き、小林幸枝との舞の共演で「流海の舞」をお届けします。どうぞご期待ください。

私は静かに目を閉じ、
残像の鎖をゆつくりと巻き上げて行った。
穏やかな光の隙間から聞こえてくる
風の姿は、遙か遙か昔、
神が森の暗闇に隠れて暮らす人間達に
海に揺れて流れる光と波によって
紡がれる心の声の交わすことを
教えてくれた日の姿であった。

その時、神は天から降りてきて森の民達に
こう言った。
「民達よ。
心を容にするもの
それが言葉です。
民達よ。
言葉には容があり
そして姿があるのです。
言葉の姿は舞。
舞は人の語る言葉の姿なのです」

人はさらさらと流れる言葉を聞いたとき
心もさらさらと流れた。
人はうるうると心揺れる言葉を聞くと
心もうるうると揺れて何かを予感する。
だから言葉は音楽(うた)であり舞なのです。
(第二景・恵みの詩より)

入場料 3000円(中学生 2000円 小学生1500円)

ことば座 315-0013茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ふるさと風の会5周年展 (6月17~19日:入場無料)

ふるさと風の会は、常陸国の国府がおかれていた石岡市を基点に、霞ヶ浦を母なる「ふるさと海」としてその沿岸周囲に広がった豊かな大地に紡いできた暮らしの歴史・文化の再発見と創造を考えるなか、自己表現としての志を述べて行こうと集まった者達の会です。2006年6月より「ふるさと風」と題した会報を月一回発行してきましたが、今年5月号で満5年を迎え60号となりました。満5周年60号を記念して、ふるさと風の会歩み展と記念講演、及び風の塾(朗読教室)発表会をギター文化館にて開催いたします。

○5年間の歩み展

・会報第1号~第60号の展示 ・風の文庫展示販売 ・風の小窓(ことば絵)展示販売 ・兼平ちえこ風のことば絵展

○5周年記念講演

「言葉と表現(伝える)」(6月18日土曜日PM1:00~1:30) 講演 ふるさと風の会代表:脚本・演出家 白井啓治

○風の塾(朗読教室)発表会

・6月17~19日PM1:40~PM2:20 朗読:兼平良雄「平家物語 第十一巻 第一百句『屋島』」

※皆様のお越しをお待ちいたしております。